

追悼—柿原謙一氏(昭12)

柿原謙一君

堀岡 清(昭10)



『部の気分を壊す様な奴は除名してしまえ、部員が少なくなつて部がつぶれても仕方ない』。例のブツキラ棒なもので、こんな酷いことを、大先輩の吉沢熊さんに針葉樹会の例会席上で言われたのは私が石神井の予科を終えて国立の本科へ行った時であつた。予科、専門部の部員が少なく、先行きが心細い時だったので本当にそうなるかも知れないと心配だつた。それが私達の卒業送別会が新宿のモナミで行われた時には総勢二十五名で、『未曾有の部の盛事と言ふ可きである』と古い針葉樹会報に載っている様に部員の数が増えていた。それも数だけでなく他の大学山岳部に比べひけをとらない有力な部員が多かつた。その中の一人が柿原君である。

彼は私の本二の終わりか本三の初め頃に入

部したと思つている。従つて私には現役中に一緒に山へ行つた思い出はない。私の最後の野沢スキー合宿(昭和九年十二月)には彼も参加しているの、漸く同じ釜の飯を食ふことになつた。

私は、彼は秩父のスペシャリストだと思つていた。彼の愛称は『神主』だつたと思う。誰が何時それを奉つたのかは忘れたが、山の中の神社の神主然として何時も悠揚迫らぬ風格物言ひでそうなつたのではないかと思つている。私は昭和十六年に九州から東京へ舞い戻つたが卒業後直ぐ秩父へ戻つた彼とは何度々会ふことはなかつたが一緒に山行きはむしろこの時以後のことである。一緒に山歩きはそんなに多くはないが、何時でも名前と顔が浮かんで来る山仲間の一人であることは間違いない。

山に譬えれば彼の郷里の秩父の様な性格が彼?をそうさせているのだと思つている。遠

くに一人で居る私に又一人懐かしい仲間がなくなつた。淋しいことである。

柿原さんにささげる

小林 茂雄(昭19)

今年のお正月に柿原さんから頂いた年賀状には、お名前の下に代筆と書かれてありました。おからだの調子でも崩されたのかな、と思つてはおりましたが、まさか、こんなにも早くご訃報を聞くとは、徒に時の流れを恨むばかりであります。

「秩父の旦那」。山田亮三さんは柿原謙一さんのことを敬愛をこめて、よくさう言つておられました。柿原さんのお人柄、家柄も含めて、まことに言い得て妙。それも只の旦那衆ではなく、学究肌で知る人ぞ知る大先輩であるにもかかわらず、はるか若輩の私達に対しても、「あなた方……」と言われ、よく山行へのお誘いをいただいたものでした。

私が山へお供した時は、大体、山田さんも



左から大塚武、柿原、堀岡清、佐々木誠の各氏
(昭和16年4月25日、小樽山にて)

ご一緒でした。この御両人の驥尾に付して、沢をつめ、尾根をたどり、テントに寝た、そのときどきの残像は、何か時がたつにつれて、ますますはつきりしてくる様な気がいたしました。そして柿原さんが山田さんとの同行登山だけで一〇〇回を迎えた記念の集まりが、その他大勢を加えて倉戸山、鷹ノ巣山でにぎやかに催されたことがありました。数十人は入ろうかという大テントをかつぎ上げての大祝宴。安曇節に始まり、終わることのない昔なつかしい唄の数々がいつ迄も夜空に流れたものでした。

このあと、僅か数年を経ずして山田亮三さ

んが忽焉として逝くなられようとは誰が考えたでしょうか。柿原さんの受けられた衝撃の大きさは、後に書かれた山田さんへの追悼の言葉の中に汲みとられますが、ただただ逆縁無常なりと述べられた短い文章の中に万感の思いが込められておりました。

そして葬送の当日。出棺前のお別れの時は、柿原さんは「元気な時の亮さんの面影を大事にしておきたいから……」と敢えてお別れの対面をされなかつた心やさしい先輩でありました。

私が柿原さんと最後に一緒した山が、加賀の白山となりました。北アルプスのどこの頂きに立つても、いつも西の方、遠く指呼する白山にはなかなか、行く機会がなかったと話をしたところ、早速、話がまとまり、私達の山の仲間の一人、好漢、木村哲夫さんが車を出して同行してくれることになりました。

岐阜県側の大白川に車を置いて登り出したが、人影も殆ど無く静寂な山行を満喫しながら頂上小舎に泊り、翌日の素晴らしい御来光を迎えることが出来ました。柿原さんはこの時、丁度七十七歳の喜寿を白山山頂で迎えられたことに、心ひそかに喜ばれていたようであります。

車を置いてある往路を戻る木村さんに、ご好意を謝しつつ、私達二人は別当口へ下った

が、この山行を通して柿原さんの御元気な様子と、いつもながらの、山道をいつくしむ様な歩き方が印象的でありました。

バス停まであと二時間位のところ迄、下った時、柿原さんは膝をいためられたようで、休止の回数が増えて来た時、私に対して「あなたは明日仕事があるらしいから先に行つて下さい。後は下るだけの一本道ですから……」と私のために気を遣つて下さるのでした。

「まあ、休み休みのんびり行きましょう」と言つてバス停まで来たが、後日、お手紙をいただいた時もこの時のことにふれられて「あなたには、迷惑をかけた……」と書かれる心くばりを頂いたものでした。

山田さんの死を無情と嘆かれた柿原謙一さんも亦、逝つてしまわれた。

昔、よく山の帰りに、柿原さんと山田さんが、呑めない私に、ニヤリとしながら「悪いけど、ここで失敬するよ」と言つて赤提灯の中に、いそいそと消えて行かれたように、この御両所ならば、今頃は対岸のどこかに、良いテントサイトを見つけておいてくれていることでしょう。

いつの日か、またどこかで、お会い出来るような気がしてなりません。どうぞ、いつ迄も変わらぬご冥福を心からお祈り申し上げます。

柿原さんの思い出

山崎 擴 (昭和23)

何分にも大先輩でもあり、私ごときが追悼文を書くなどというのは誠に烏滸がましいかぎり、心に残る思い出などを綴って偲ぶのがとしよう。

針葉樹会の席は別として、ご一緒した山行として記憶している最初は秩父御岳の懇親山行であったかと思う。記録など取ったことがない無精者なので、何年何月ということもいえないが、吉沢さんなども参加されたのであったから、随分と前のことである。従って山のほうはほとんど忘れてしまったのだが、いまでも鮮明に覚えているのは前の晩に泊まったのが秩父鉄道の関係の宿舎で、例のごとく大広間で宴会となったのだが、向い側に陣取っていたのが鉄道の社員であったので、柿原社長がたちまち見つかってしまい、やむなく安曇節か何かだったと思うが、歌わされる羽目になった事である。日頃の社長さんと

社員の間柄を垣間見るようで微笑ましいひとこまであった。

後に、秩父の熊倉山かどこかの帰り、当時は秩父鉄道と西武電車の乗り換えは町中をかなり歩かなくてはならず、従って素通りは出来にくい関係にあったから、そこらの焼鳥屋などにつかまるのが通例であった。話の具合で、柿原さんの名前が出た時、目の前で鳥だか豚だかを焼いていた親父が「あゝ、謙ちゃんね」と来た。聞いてみるとご家族のことなどもよく知っているようで、まんざらハツタリでもなさそうだったから、これも柿原さんと町の人々との温かみのある関係を感じたものであった。

拙い山の写真を年賀状にして差し上げると、いつも手作りの葉書で返事を頂き恐縮したものであったがもうそれも見られなくなった。

一度だけ個人的なことでひどくお世話になったことがある。これももう一〇年以上前のことになるが、愚息がまだ大学院とかいつて際限もなく脛をかじられていた時分、担当の教授から電話が掛り、就職先を推薦したい、ということであったので親としては一も二もなくお願いするといったものの、何としても急いで本人の意向を聞きたいという。ところが、肝心の本人は雲取山のどこかという、沢登りに出かけており、連絡の取りようもない。

そこで思い出したのが柿原さんである。

無理な話ではと考えつつも、必死の思いでお願いをしてみたところ、快く引き受けて下さり、小屋へ無線連絡をし、小屋では要所に張り紙までして呼び掛けていただいた。まことに心強く、感謝の極みであった。もつとも、本人は翌日になって、ケロリとして帰宅し、テントで寝て小屋には寄らず、ピラも見なかったという始末ではあったが、この時ほど柿原さんのご親切が身にしみたことはなかった。

これから暫くして、秩父から「棒の折」に登る懇親山行があり（昔はキチンとあった）柿原さんのお供をした時、「以前から秩父地方の近世の農村を研究しているのだが、その原稿を出版してくれる所はないであろうか」というお話があった。お世話になった愚息の就職先が岩波書店であることをご存じであったからだ。一応お聞きはしたものの、何としても新参の社員のこと故、お力になれず自費出版部門をご紹介する程度しかお応えするところが出来なかったのは申訳のないことであった。その後そのご研究がどうなったかいまでも心に残ることである。

柿原さんのご一家にもお世話になった。ご子息の和夫さんには針ノ木の雪溪を案内していただいたり、今はその奥さんになられた日

江井さんのご息女歌子さん（確かそういうお名前であったと思うが、違ったらごめんさい）には燕岳の懇親山行（また出た）で一緒に緒させていただいたことがある。それらはいつも山田亮三さんがリーダー格で参加している、これはまた別の思い出に繋がってしまうのだが、柿原さんも山田さんのベースであった大町のエコノミスト村はよく利用されていたようで、そこから早朝、例のタオルで鉢巻をした山支度の柿原さんを、二日酔いでフラフラしながらお見送りしたことがあった。当時もう七〇近いお年であったと記憶するが、背筋のピンと張った姿に、なにやら古武士の出陣を感じさせられて、今でも強く印象に残っている。

西武線の秩父駅から山へ入るバスに乗ると、最初の停留所が熊木町で、あゝここが柿原さんのお宅だなと思いつつ、いつも素通りしてしまい、ついにお訪ねすることがなかった。若いころの山行のことなど伺っておけばよかったと悔やまれる。

一橋山岳部の黄金期を築かれた方々が、いまや暁天の星のように少なくなりました。いままたその大きな星の一つが消えた。人の世の常とはいえ寂しい限りである。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

柿原さんの山旅

倉知 敬（昭37）

柿原さんはまことに息長くたんたんとした山登りを続けて来られた登山家であった。私のように歳の隔たった、柿原さんから見れば若輩の者のお付き合ひも、基本は一緒に山に登る、というところにあつた。当然もう晩年ともいべき時期になられてからご一緒する機会を得たのであるが、私にとってそういう間柄になった人としては最年長の、いわば山仲間という感覚で接することのできた大先輩だったのである。山ではいつもかくしゃくとして、心から山を楽しまれている風であり、共に山や花を眺めているところらも心豊かになるといった印象が強く残っている。

そういう世代のかけはなれた者が柿原さんの山についてとやくく述べるのは、特に初期の頃の登山について知り得るところ少なく、理解の浅いままで不遜ではないかと思うが、同世代の方々の多くが既に亡くなられており、そういうことを書く人が居ないと聞き及んだ

ので、あえて私なりのものを書いてみたいと思う。

ご葬儀に出席した折、ご長男の和夫さんに多分柿原さんのことだから詳細な記録を残されているのではと尋ねたところ、整理された形ではないがたんねんに書かれたものがあるとのこと、後日それを取りあえず山行表にまとめたものを送って頂いた。そのうち、一九七一年から七九年までの分は、針葉樹会報に各年の山行表として掲載されたものがある。全部をここに載せれば、それ自身が山行歴を物語り一番よいが、それでは膨大なものになるし、別にきちんとした形で山行譜をまとめる予定もあると聞く。ここでは、生涯にわたる長い山歴をいくつかの時代にわけて、それぞれの時期の特徴、傾向などを簡単に紹介することにせよ。

山行表の最初は、一九二七年（昭2）九月の武甲山から始まっているが、第一期ともいべき時期はやはり、商大山岳部の一員として山行を重ねられた一九三四年から三七年（昭9、12）が中心となる時代であり、その間の登山の密度が断然濃い。山岳部合宿と思われる谷川岳、燕・檜縦走、鳳凰山、穂高湖沢、剣沢などの山行のかたわら、特徴として甲武信岳他の奥秩父に通われ、また野沢や乗

鞍のスキー行を重ねられたことが目立つ。

その頃の一橋山岳部は、創立以来の山旅を旨とする活動から登攀中心の山行へ幅を拡げていく移行期ともいうべき時代で、そのことを柿原さんは針葉樹会報誌上に次のように書かれている。

「登山には大別して二つの仕方があった。

一つは山旅であり、芭蕉が平泉から山越えで出羽の立石寺に至り、〈閑さや岩にしみ入る蝉の声〉(奥の細道)と吟じた心境にもつながらる態度。二つは近代アルピニズムであり、槇先輩がスイスから、わが国に導入した登山態度。一橋山岳部は、当初から主として一の仕方であったが、一九三六年頃から二の仕方が主流となってきた」(75号、「どうにも分かりませんが」より)



左から高木、山田、佐々木、望月、柿原の各氏(1979年11月24日、御座山山頂で)

柿原さんは、この変革期に遭遇し、自ら山旅派をもって任じ、かつそれを徹底して生涯実践されて来た人であった。再びご自身が筆にされたものを借りて言えば、柿原さんの会報への最後の寄稿である岩崎さん追悼文に、その信条をこう表現されている。(地蔵岳オベリスクでの森川さん遭難にふれた後に)

「この遭難事故の前後から、山岳部の中は田部重治さんの登山態度とヨーロッパ的登山態度の二つの傾向を進むように分岐したと、私は思っている。(中略)ただ私は、田部重治さんの登山態度に共鳴して、その中に岩崎さんもいるのだと信じ、八十四歳になる私の人生をふり返って、安心してはいるのです。」(84号、「岩崎利一さんを追悼して」より)

次の第二期は、卒業後、戦時期を経て秩父周辺の山々を中心に歩かれていた比較的長い時期、年度を区切るとすれば一九三八年から六四年(昭13〜39)ということになる。社会人としての活動、戦争の前後、などの事情から前半は山行も少な目だが、後半の五七年以降は毎年コンスタントに五、六回の山行を、主に雲取山、武甲山、越後湯沢スキー等を中心に繰り返されている。その間、同行されているのは、和夫さんをはじめ御家族の方々で

あることが多く、あるいは清水武甲さんなど同郷の人たちも数多い。山に囲まれた秩父のご自宅を根城に、山を眺める内に気の向くまま、周囲の人を誘っては奥山逍遙を楽しまれたのであろう。なかには昭29年の秩父宮妃を招いての秩父宮レリーフ除幕式を霧藻ヶ峰で、昭38年の田部重治レリーフ除幕式を雲取山で行ったものもある。また、昭13年には日本山岳会に入会されている。

一九六五年(昭40)から次の第三期の始まりとするのは、この頃から針葉樹会員との山行もされるようになったからだが、同時に会報への執筆をこれ以降ひんぱんにされている。そしてやがて登山復活された山田亮三さんという晩年の良き山仲間を見付けて、二人で歩く山旅を中心に活発な山行計画をこなすように発展していく前の、七二年(昭47)あたりまでが一応一時期としてくくられていいのではないか。その間、秩父の山々などを中川さん、村尾さん、近藤さんたちと歩く傍ら、昭42年奥又白、昭44年瑞牆山などの針葉樹会懇親山行にも参加されている。また、毎年のように雲取山に登られ、熊倉山、秩父御岳なども含めて単独で登る回数が多くなっている。

そして第四期は一九七三年(昭48)あたり

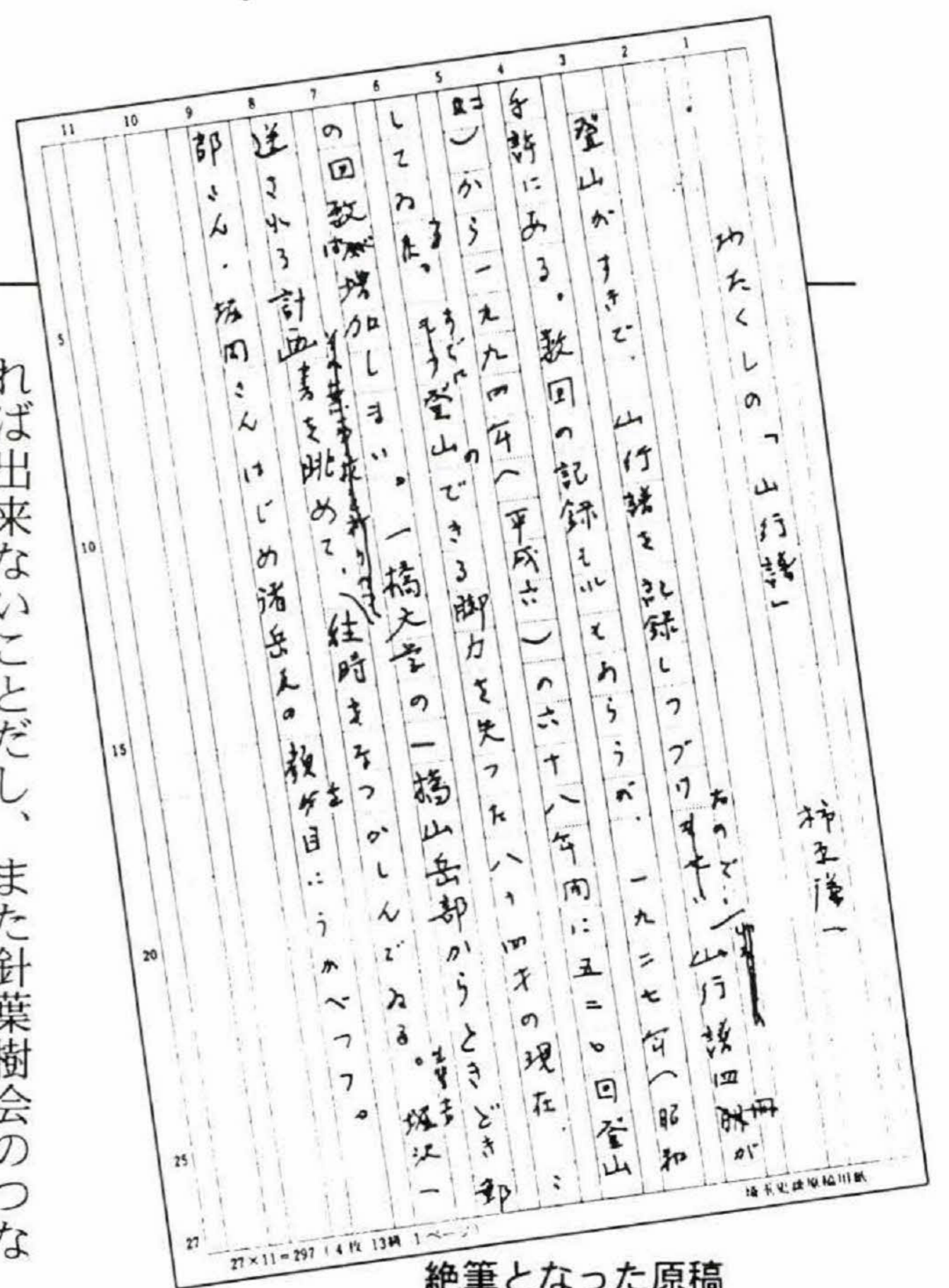
からの、いわば山田山行中心期だ。それは通算一〇八回を数え、悲しくも昭61年の水沢山く相馬山縦走で、以降山田さんの病状芳しからず、終わった。その間の山行は、前半の七年（昭54）までは当時会報に年間山行表が載る欄があつて毎年投稿されており周知のところだが、その後も含め北アルプス、上信越、東北など幅広く歩かされている。傍ら、やはり秩父周辺に通う方も続けられ、結構単独行も多い。

何故お二人がそのようなうまが合ったのか、ご自身は山田さん追悼文の中で、不思議だと述べているが、多分自然を愛でる心といった情緒の波長が合つていたということだろう。それに何といつてもお二人とも足腰が達者であつた。ある山に登ると、こう言う山の風情もいいねえ、じゃあ今度そこへ行くこう、といった連続性があり、また次の山へ出掛ける元気に満ちていたのである。その中に混じつて私も何度か御一緒させてもらったが、何事も大まかな山田さんと比べて柿原さんは諸事きちんとしていた。そういう時、決まつて柿原さんのザックは短い山行でもひときわ大きい。いろいろの不時に備えて細かい備品を携行されていくせいなのである。そういう余裕を決して忘れない昔風の山の達人だつた。

山田さんとの山行が跡絶えた後も、望月さ

んや佐々木さん、小林さんなど或いは様々な会員外の友人と山行を重ねられているが、また単独行でも盛んに出掛けられている。山行表から一九八〇年代の十年間（81〜90年）の山行回数を数えてみると、毎年二〇回から三〇回を重ねられ、総計二四六回、つまり月二回位の頻度で足繁く通われている。特にこの頃の山旅への打ち込みようが相当なものであつたことがうかがわれる。遠出の山としては九〇年の加賀白山（8月、同行者・小林茂雄、木村哲夫）が最後だつたようで、九〇年代に入ると山行も程々となり、和夫さんのお便りにあるように「足が弱つていく様子」が山行表ににじみでてくるのである。

柿原さんは秩父市在住のせいもあり、針葉樹会の会務に就かれる機会は、昔は別にして（卒業直後針葉樹会報編集幹事）、なかつたが、会報には熱心に寄稿されて来た。戦後復刊して今号が91号だが、8号以来投稿は四八回におよびそれは全会員随一である。山行の都度、あるいは書評や随想、山行句などを頼まれば必ず、寄稿されるのである。このことは山に長く関心を持ちつづけて実践する意欲がなけ



れば出来ないことだし、また針葉樹会をつながりをおこなうものと考えられていたからであろう。針葉樹会の存在意義はつきつめれば、山への関心と仲間意識である。そういう意味で、いふなれば針葉樹会の本質を支え、体現化してきて下さつた柿原さんを偲ぶよすがとして、もつとも適切なのは今一度その会報寄稿文を味読することかもしれない。そのために、ここに寄稿リストを付記させて頂くことにしたい。

最後に、直接のお付き合いの思い出について少々述べさせてもらえば、柿原さんが私にとつて身近かな存在となつたのは、六八年三月に、神流川源流の三笠山に登つた帰り途、山田さん、中島さん、大賀さんと一緒に秩父

のお宅に立ち寄り、親しくお話する機会を得たことだった。その時、広大な邸宅で端然としてこやかに語られる姿や雰囲気強い印象として残ったが、何のお話だったか記憶に定かでなく、その時のことを書いた針葉樹会報（第22号）の大賀さんの記事（「北秩父アルペン・ドライブ」）を見てみたら、「柿原さんは静かな口調で、秩父の山々のこと、八年も戦争に行っていたこと、等々、淡々と話をして下さった。」とあり、その他「ノープルな柿原家の雰囲気」について書かれてある。

その後、柿原さんは針葉樹会員などを中心とした仲間と活発に山行を重ねられるようになり、私も何度か御一緒した中でも印象深かった山行は、例えば、四阿山スキー登山（75年3月）、下栗部落からの御池山（76年12月）、阿部木谷から登った毛勝山（80年8月）などである。いずれも同行は山田さん、和夫さんを含めた四人で、山よし人よし天気よしの快心の山、まことに楽しい思い出の山行だった。今年の正月にも年賀状を頂き、それには「和夫夫妻は双方の父が老病臥床の正月で大変です。こちらは自宅で痛がったりばやいたりして居ります」と添え書きされてあった。ただ「ご安泰を祈るばかりだったが、間もなくして和夫さんから唐突の訃報を受け、まさかと耳を疑ったのであった。昔のように秩父の山を

柿原謙一氏の針葉樹会報寄稿リスト

号	発行年月	表題（執筆日、山行句記載中の一句）
8	64/9	野沢温泉のこと（1964.1）
9	12	このごろの私と山について（64.1）
10	65/5	奥秩父句抄〈山小舎の子犬尾をふる 野分かな〉
16	67/2	山行句〈霧しまく 峠に暮れて 煙草の火〉
18	5	山行十五句〈老鶯や 分れ路に立つ 石地藏〉
19	8	志賀高原の雪
20	10	十文字峠
24	69/3	村尾さんの杖と天狗平
31	71/12	小谷部・森川両君のこと 1971山行表
33	72/7	両神山から天理ヶ岳へ（1972.5）
34	9	低い山・中川さん追悼
35	12	朝日連峰縦走十七句〈テント張り かなた飯豊に 稲光〉
36	73/3	1972山行表
37	8	四月の御嶽山（1973.4.15）
38	74/1	山行句抄〈安達太良の ほんとの空に 秋の風〉
39	5	四阿山八合目スキー行（1974.3.18） 1973山行表
40	9	上武国境の三つの峠、杉ノ峠・坂丸峠・尾久峠（1974.8）
41	12	嘉門次小屋の秋〈茸焼きて 嘉門次小屋 地酒くむ〉 （74.10.17）
42	75/3	茅ヶ岳と金ヶ嶽（1975.1.2） 1974山行表
44	9	いやだよ山ダニ君、赤城・黒檜山（1975.6.22）
45	12	学名はスフェニンデ、村尾さん追悼（1975.11.14）
46	76/6	1975山行表
47	9	留心山谷の先輩（1967.7.10）
50	77/8	1976山行表
51	12	ヌクイ谷を登る
53	78/11	下栗部落と御池山（1978.9） 1977山行記録
55	80/1	藪こぎ爺ヶ岳
56	6	ゲレンデスキー婦人（1980.3） 1979山行記録
57	10	クマさんの新著「山へ」
59	81/6	五月の大町で～明星山南壁と高浪池
60	12	奥大日の乙女
62	82/12	林俊介さんを偲んで（1982.5.1）
64	84/12	東京商大一橋山岳部の昭和十一年前後（1983.11）
65	85/6	山に忘れた上衣（1983.7.14）
69	87/6	志賀坂峠・諏訪山・八丁峠（1986.12.14）
70	11	書棚から「忘れえぬ山の人々」
73	89/7	逆縁無常、山田さん追悼（1989.4.7）
75	90/6	どうにも分かりませんが
76	91/3	いくらか分かりましたが（1990.8.6） 「山田亮三文庫」の前で
77	11	追悼の小林重吉さん
80	94/5	近藤さんと吉沢（松）さん
84	97/7	岩崎利一さんを追悼して

訪ねる折にまた柿原邸訪問をしたいと思い、前年秋には、丸山さんと両神山へ向かって車を走らせた時に、それを念頭に置いていたのだが、その時はひどい渋滞に巻き込まれて秩父市に入るまでも至らず、代わりに武川岳にそそくさと登って帰って来てしまった。かねて自宅ご療養中と聞いていたので、押しかけるのもどこか気兼ねすることもあったが、ひと頃ひんぱんに山でお目にかかっていた時のあの屈託のないご様子を、こちらはいつの間にか感覚として稀薄にしか思い及ばずに勝手に

に壁をつくってしまったかも知れず、行こうと思えばいつでも行けたのに、ずるずるとそうしないままにしてしまった。
結局二度目に柿原邸を訪ねたのは、ご葬儀出席のためとなった。秩父はどんより雲がたれ込めてひどく寒く、頭を隠した武甲山が雪まじりの重苦しい姿を見せていた。その日のどこか心のこりのひっかかる暗い気持ちとは裏腹に、柿原さんの思い出はどれもこれもさわやかに明るく、そしてたしかかなものとして静かに心に残るのである。

追悼―田中一雄氏（昭23）

田中一雄君とのこと

真木 淳一郎（昭和22）

倉知編集委員の折の針葉樹会報（1999年）で田中君が「ノドの手術の後遺症で体調不良、会報への寄稿は遠慮したい」という会員欄を読み心配していたが、遂に本年2月不帰の客となられたことを聞き、誠に哀悼の念に堪えない。昭和21年、小生が約半年間彼の家で寄宿していたことを知る樋口兄を通じて追悼文を頼まれたが、山岳部員たりし会員諸兄に何も語る資格のない小生。山岳部員の縁だけで、同じ釜の飯を頂いた当時のことを回想し、田中君を偲ぶよすがとなれば幸いです。

昭和18年学部で繰上げ編入、学徒臨徴までの予科時代の山行は小生にとって生涯の忘れぬ思い出となったことは、学部入学五十周年記念誌に綴った通り。重複するが、クラスチャンポートレースで優勝したクルーの名



コックスとおだてられ、否応なしにポート部へ編入させられ、夏休みも向島艇庫で缶詰合宿の身となる。強制収容されたポート部へ「好きな山に登りたいから」という真つ赤な嘘の脱退届を書いて釈放された。さすが商大ではある。

初めて秩父は金峰山のピバーク登攀へ。山岳部員には何でもない山だが、ここで死ぬ程の苦しい思いをし、「エライ所に入ったもの」と慨嘆するが、自らの意思と責任で選んだ道、後には引けじと覚悟を決めた。それからの夏の涸沢合宿、冬の乗鞍スキー合宿、春雪の富士登山とグリセード訓練など、小生なりにエンジョイできたが、二年下の田中君等と行を共にしたのはこの頃だろうか。

学徒出陣・終戦・復員後、しばらくは知多の自宅で食べるのに精一杯の毎日だったが（後日の卒論のテーマとなる経験はこのとき）、復学のため笈を負って上京する。校内に残つ

ていたあの山小屋部室に寝泊りさせて貰うこととする。石井左右平君や故中村讚治君等四、五名のサムライが、登攀再開の食料確保の為、立川でじゃが芋畑開墾作業の合宿を始めるので賑やかになった。新部室落成記念の特集号によると、小生の前か後かに、伯耆先輩が中二階で寝泊りされた由、またその後は横山君がしばらく住んでいたことを知る。居候の白眉は何と言つても「戦争で部室を閉じた頃」の山崎擴君の苦心談（彼の人柄から苦労話は愉快な思ひ出話となっているが、大変なことだったと推察する）、これは貴重な部史の一頁だ。

小生は持参の食料が続く限り居座る積りだったが、部室を訪問してきた田中一雄君と再会し、やがて彼の邸宅の一室を使用して欲しいという青天の霹靂の申し出を聞く。当時不足していた駐留軍の宿舍として、余裕住宅は一部接收されるかもしれないおそれあり、空室を塞ぐ為白羽の矢がたてられた。彼の父君も三井物産海外支店長をされた一橋の先輩であり、山岳部員だけのよしみで、我家より豪邸の二階のベッドつき洋室へおさまった。部室小屋とは雲泥の差あり。

やがて学徒臨徴で復員した戦中派学生は単位課目を修得せずとも、卒業論文のみを担当のゼミ教官（上田辰之助教授）に提出し承認

されれば卒業叶うべしという特令が発せられた。地方在住者は勿論、在京学生といえども通学して単位を修得する余裕のない時代、さすが一橋である。九月の卒業予定が迫っていたので、早速自宅に引き帰り卒論作文に専念することとし、田中邸を辞去する。進駐軍接収の心配もなくなったので、よい潮時でもあった。田中君の隣室で起居を共にした半年間、実は小生が開拓したユニークなアルバイトを通じての交流で、先輩らしき責を果たし得たことがせめてもの慰みである。

戦前は三井物産、三菱商事の貿易商社が最もスタンダードな就職先であったが、戦後卒業後の就職先など不確かな時代である。今後はどうなるか？自分の性向にあった好きな職種を選択しよう。例えば好きな映画や演劇の会社で、俳優になる積りはないから製作、演出にかかわるマネジメントの仕事などがあるだろうと思った。然し具体的な就職先となると、やぐざの水商売の興業関係はやめて欲しいと、両親とフィアンセの反対にあい、あきらめて名古屋は松坂屋に就職する。

映画は先ず西部劇、例えば平原児の面白さに度肝を抜かされ、青春時代はパリー祭、パリの屋根の下、、舞踏会の手帳などの仏映画、会議は踊る、制服の処女、民族の祭典などの独映画に感銘した。日米開戦で米国人は物質

万能、個人主義、快樂主義でおそるるに足らずと言われたが、西部劇などにみられるパイオニア・スピリットとそれを支えるキリスト教精神など、エネルギーとバイタリティのヤンキー魂はアメリカで生活体験をした人にとっては勿論だが、小生もスクリーンを通じて実感、予感していた。映画にはそういう先見性もある。

その米映画を配給する機関として設立されたC M P E (セントラル・モーション・ピクチャ・エキスチェンジ、ワーナー・二十世紀フォックス・デイズニーなどの米映画会社の寄り合い世帯)のアルバイトに採用された。これを足がかりに好きな映画に関係ができるかもしれない。もう一つの関心事は、貿易に代わる観光の仕事で、当時のホテル業界のトップクラスは帝国ホテル、第一ホテルなど一橋の先輩が占めていた。ホテルなら環境もよく、美味しい食事がありつけられるかもしれないというさもし根性もあつた。

J T Bに勤める先輩を今という企業訪問をした所、岩国駐在の英濠軍兵士の東京付近観光案内のアルバイト役を紹介された。恵比寿の英軍キャンプの窓口は、フローレンス田中というロンドン在住経験の婦人で、一橋の学生なら日光と鎌倉の文化施設を担当するガイド役を任せるとのこと。英文の日光、鎌倉の

ガイドブックを丸暗記して、現場で解説すれば何とかなると興味を抱いた。折角、確保したC M P Eの貴重なアルバイトも惜しいが、関心を持っていた田中君に譲ることとした。恵比寿キャンプへ上京したオーストラリア、印度、グルカの兵士を交代でレクリエーション・ツアーに案内するガイド役は結構面白く且つ有意義であつた。印度、グルカ兵はバケツ入りのカレーとお好み焼パスタを持参するので、昼食のお相伴にもあずかった。この仕事も卒論作文に専念する為中途断念せざるを得なかったが、幸い田中君が喜んで引き継いでくれた。

田中君はアルバイトをしなければならぬ境遇ではなかったが、その頃の学生の最大の関心事はアルバイトであり、流行でもあつた。頼りない先輩である小生がユニークで面白いアルバイトを開拓したことに、彼田中君は畏敬の念すら抱き、進んで引き継いでくれた。とくに英濠軍兵士の観光案内役は実地の英会話修得のチャンスとなった筈だ。豪州訛り、印度訛りの英語ではあつたが、彼は父君の三井物産系の商社に就職し、長い米国駐在の商社マン生活に役立ったことと思う。女性の憧れの職場であるスチュアーデス(トップクラスの日航)嬢を伴侶に、仕事はキビシイが待望の海外生活を完うされたことだろう。

話はさかのぼるが戦争中の昭和18、19年、山行の頗る困難な折柄、残り少ない部員の山崎君や笠原君等と共に、奥又白池、前穂・槍ヶ岳、鹿島槍などへ精一杯の挑戦できた喜びを、目を輝かせ乍ら語った田中君の顔は岳人の顔であった。また同期の大島君同様、山岳部員には珍しいスマートさと、心やさしさを

寸断の山岳部生活

樋口 洪 (昭22)

山に関心を持ち始めたのは旧制中学の後半、当時山好きの博物の先生に案内され四季の休み毎に八ヶ岳、北アの初歩コース等特に中学五年の夏、燕、常念から眺めた槍、穂高連峰の光景は忘れられず進学希望の商大予科に入学の上は是非山岳部に入部したいと心にきめた。昭和十六年幸に入学出来、山岳部の門を叩き歓迎会に出席した新入生は私一人。大変にさびしい思いをしたが歓待ぶりは大したもので感激したのを覚えている。現在の新入部員の少ない山岳部もかくやと思はれる。

当時諸先輩の熱心な勧誘活動もあり一、二

兼備した紳士でもあった。

山に関係のない俗界のひとりよがりの回想記で、針葉樹会報の貴重な紙面を汚すことになったことへのご寛恕を願うとともに、故田中一雄君のご冥福を心から祈って擲筆させていただきます。

平成12年4月

の入部生もあつたが前年の遭難、当年の秩父遭難等悲しい事故続きに恐れをなし去つていった。

昭和十六年夏の最初の合宿は前に森先輩も書かれていた針ノ木越え五色ヶ原での前年の遭難追悼除幕式に全員と合流。途中平の小屋前のテント宿泊の折、小屋のオヤジからあの人(森先輩)は先生かと当時未だ丸坊主予科一の小生と可成り頭の毛が薄くなりつつあつた森さんを見比べて質問があり合宿中全員 of 笑いの種となつた次第。

五色ヶ原では剣合宿を終えた一行とも合流、追悼後黒部の源流をつめる大縦走、低気圧の来襲で黒部上流で幕営二晩、嵐をやり過ぎしズブぬれの姿で三俣蓮華の小屋にとび込み熱い塩湯を茶碗で飲み込んで助かった思い。翌日快晴の中、槍ヶ岳を経て一気に徳沢へ。これ程長い山行は初めてで数日徳沢に滞在中に

上高地郵便局から無事合宿終了の電報を家に打つ。

十六年十二月、日米開戦、然し我々の生活とは若干の距離感があり冬には乗鞍スキー合宿、翌十七年四月には同学年の真木、野尻両君が入部し又新入部員も多く入り心の支えになつたことを痛感する。この年の夏の涸沢合宿終了後、当時予科一の関君と二名で焼岳を越え槍見から笠岳へ、クリヤ谷の登りにアゴを出し、笠の肩にテントを張る。その晩刻々と暮れ行く飛騨側からの黒々とした穂高連峰は先日まで眺めていた涸沢からの穂高の峰々とは又異なつた景観であり今思い出してもあの世まで持つて行きたいと思う程である。

笠から抜戸、双六池、前日から双六迄誰一人出会う人も無く水晶小屋に投宿、翌日烏帽子を経て葛の湯とかけ下りて帰る。同行の関君は後に大学の教授に、また一時期山岳部長をやつて貰いえらい人との同行だつたと後で思う。昭和十八年からは今迄の自分達をとりまく世相も一変し徴兵猶予停止、その年の暮れには学徒出陣と暗黒の世界に突入した。再び山に登れる時代が来るかと思いつつ軍隊生活は流れた。敗戦―平和、再び大学に戻つたものの生活は一変し戦後一、二年は日々の生活に明け暮れ、いもの買出し食料の調達の間をぬつて学校、部室へ顔を出すことが精一

杯の日々。戦後二年目、無理して闇の米を集め辛うじて涸沢合宿、奥又山行と復活の形をととのえたが中味の空洞は否めない思いでその年の九月卒業となった。

戦後の生活は馬車馬の如く働かされ日本の復興に寄与出来たのかなと自問自答を繰り返すのみ。戦後三十年を経て辛うじて昔の山々をなつかしみ、又山岳部OB山行及び単独行等で奥穂、赤岳他、甲武信他、等々の山々昔の山行をなぞつての山歩きを楽しんで来た。

川蔵公路の旧道を歩く

横山 皖一（昭27）

中村保君（昭33卒）と彼の友人と3人で成都・ラッサを繋ぐ川蔵公路の旧道を昨年10月に歩いた。中村君による記録は本会報の前号に掲載されているが、以下は私の体験を記録したものである。

旧道の理塘からラマヤは一車線で自動車が入るけれど、此処からの輸送は馬を利用することになる。旧道の記録は最近まで立入禁止区域だったので新しいもので1911年、外

然し平成二年のOB懇親瑞牆山行の下山の折に膝に激痛が走り足が進まず一行に迷惑をかけたことと其の後各種の治療を重ねるも老化が原因の為思はしくなく山らしいところへ行くと断念、今日に到っている。そして僅かに山を眺める温泉などを求める生活になつてしまった。今から考えて行き足りないところ多々あるも、とぎれとぎれにしる山に接することが出来たことは少年時代からの夢にながったものと幸に思っている。

国人の歩いたのは88年ぶりくらいらしい。

今回のキャラバンは出だしから難続きで、先ず9月30日上海―成都の飛行機が4時間遅れ、ホテルに入ったのは夜中の2時近かった。

10月1日10時40分出発。テント、ガスボンベ、食料などと3人の個人装備でパジェロの荷台は満杯。運転手、通訳と5人の足下にもサブザックが置いてあり、助手席の私の足下もカメラバッグと私の注文で買い込んだハミグワが3個置かれ足を動かすのも窮屈だった。

二郎山越えは距離は短いが難路のため一日交代の一方交通で2日は通れない日だから今日は泥巴山峠を越えて漢源まで足を伸ばした。10月2日は康定入りを計画し、美しい石棉

の街で一休みまでは良かったのだが大渡河沿いの道まで来ると霧雨となった。11時50分、幅3mくらいの小川に今朝の豪雨で流された直径2、3mくらいの岩が何個も転がって通行は不能となり、自動車が10台くらい溜まっている。土曜日のためブルは来ないと言い、13時頃にやっと人力で障害物を動かし始めた。大岩が2個動けば私達の四輪駆動なら通るとは出来るが、この先にも同じような処が2、3ヶ所あるという。そう言えば、上りの車は一台も来ていない。石棉まで戻り泊まっても3日は日曜なので全部の修理回復は見込めないと判断し、漢源を通り越して二郎山の登り口の雅安着は19時であった。

10月3日 雅安発8時 工事中のトンネル入り口11時30分、開通は12月1日と公示されており、そうなれば取り付け道路の一車線はもちろん工事中の二車線も完成し大幅な改善となるだろう。がたがた道の二郎山峠（2930m）を越えてトンネル出口まで約2時間半、トンネルを通れば20分くらい？ 登るときの曇り空は峠から晴れの天気、12月からはトンネルを抜けると青空ということになるだろう。

峠を下りきった炉定は昔の中国・チベット国境で、有名な鎖の吊り橋（幅約5m、330年前建造）が大渡河に掛かっており、現在

は人の通行のみ許可している。此処の争奪戦は毛沢東の長征でも有名な話である。この日は康定に泊まる。

10月4日 8時10分発、朝晴れ午後曇り。初めて4000m台の折多峠(4150m)を越える。高度の影響がおしゃべりの中国人通訳は青い顔をして黙り込んでいたが私は何ともなかった。途中で中国の最高峰ミニヤコシカが見える筈なのだが厚い雲の中にぼんやりした姿しか撮れなかった。13時雅江着。半日の休養とする。

10月5日 7時15分発。4400mの峠を越えて理塘へ、この町外れから川蔵公路旧道に入る。一車線のごろ道で4740mのガララ峠を越えて17時15分、ラマヤ着、此処は電気も水道もない寒村である。18時ころより小雨、村長宅に招かれ夕食を食べる。先ずバター茶、これは空になるとすぐ注ぎ足されるから、いらぬ時は不要(プヤオ)と言って断ることが必要である。次いで出てきたのは、馬鈴薯の細切り炒めと菜っぱ炒めにご飯とスープだけであった。普段の生活がいかにつましいものであるかが想像できる。

10月6日 馬の手配に時間が掛かるので、もう一日滞在することになり、午前中は写真撮りに歩き回る。泊まる場所は香港の中国人が寄付した病院の個室でベッドが一つ置

いてあるだけで、部屋に一つの窓には珍しい外国人の顔を見に来た子供達が鈴なりである。なお、入院している病人は一人も居なかった。14時頃より小雨、一時あがったが16時半頃から雨となる。前日のお礼に山羊を一匹(120元)買って村長宅と一緒に食べる。モツの煮こみ、肉の煮付け、葉っぱの炒めにご飯とスープ。今日は郡長も参加している。村の人口は約1600人(230家族)このうち54家族は遊牧。

10月7日(8度C)馬が7時に来るので暗い6時起床、食事を済ませ待っていたが10頭全部揃ったのは7時45分だった。私達3人と通訳の馬4頭、馬方の3頭に荷を運ぶ3頭で計10頭、馬方の馬は個人の荷物と食料なども付けている。前夜遅く満天の星だったが今日は曇り、出発8時45分、約1時間で4065mの峠を越えてチベット高原に足を踏み入れていく。最後の部落を11時15分に見送ると人の住んでいるのは遊牧チベット人のテントとラマ寺(冷泉寺)付近だけである。

林の中を歩いていたら、前から来たチベット人に「ダライラマの写真を持っているか」と聞かれた。あれば欲しいと言うことで、ダライラマの影響力は未だ相当なものらしい。しばらく行くと氷河のある山が顔を出してきたので馬を下りたが雲が多くてなかなか気に

入ったのが撮れずに時間を無駄にした。馬に登山靴で乗っており、運動靴の方が楽なのが險しいところでは足を痛めてしまおうだろう。馬に括り付けた私の丈夫なキスリングザックもキヤラバンの間に木の根、岩角に擦られて数力所引き裂かれてしまった。

馬に2時間も乗っていると腿の内側が痺れ下馬してもしばらくは座り込みたいのでトイレ下馬の時は大変である。防寒衣を着込んでいるから乗るときも降りるときも馬方の世話になり、一人で降り降りしたのは2、3回だけであった。小さい2つのパゴタを見ながら溪谷を山に向い、約1時間20分でラマ寺に着いた。私達はチベット人僧侶一人が住んでいた寺のそばの宿泊所を利用でき、他に空の宿泊施設が数軒あった。

10月8日(5度C)6時に起きてすぐ食事、カメラを持って外に出ると馬が2頭しか居ない。他の馬は下の方に牧草を食べに行ったらしいので馬方2人がそれを探しに行く。この間私達は少し上の方に歩いて美しい川の流れて前にした5000m級岩峰の写真を撮ることが出来た。馬がつかまっていたので10時に出発するが、急な下りなので歩いていく。10時30分待っていた馬に乗り、チベット人のテント5、6張りを見ながら12時30分まで騎乗し焚き火でお湯を沸かし昼食とする。テント場(4

025 m) についたのは16時だった。

10月9日(2・5度C) 晴れ 6時半ごろ音がするので起きてみると放牧民が荷を付けたヤク、ヤクと羊の群と共に何組も通って行く。食事を済ませ徒歩で出発し10時半ころ馬に乗る。川を何回も渡って行くが馬の腹すれすれの処もあり緊張する。ゲニイ山の南面が素晴らしいところに出たので、ゆっくり何枚も撮ることにした。テント場(4400 m)着16時40分。

10月10日(2度C) 9時15分出発、30分で峠に着き、ゆっくりと写真を撮る(9時15分〜10時10分)。次ぎの写真タイム(11時20分〜30分)。11時45分、明日登る分岐点を通り波密(3750 m)に12時30分到着。

地区事務所になっている大きな建物だが(部屋は10くらいあるのだが使えるのは3部屋だけ)の1部屋を使わせて貰うが、煙突が屋根の上まで出ておらず屋根裏まりのように火事が心配だった。トイレは敷地内になく隣の小学校まで行くから不便であった。電気は来ていないのにパラボラアンテナがあるので、他の部屋を見ると発電機が置いてある。外国人の家が残っているというので見に行ったが、1947〜50年医者として2人の牧師が滞在していた家で、当時は前の小川で小さな発電機を動かしていたという。新中国によ

る凄まじいチベット人迫害の事実を伝えるため、村の有力者数人と共に1人が雪の横断山脈を越えてインドへの決死行、残された1人は逮捕されて監獄へ収容された。(初の平屋は現在二階屋に改築)

10月11日(5度C) 替え馬は8時に来るはずだが全く姿も見えないので学校に遊びに行く。先生3人と36人の生徒、休み時間にサッカーまがいで遊んでいた子供たちは珍しい外国人の周りに群がってくる。やっと馬が集り出発は14時30分、馬方の要求で此処からは1頭増えて11頭となる。昨日の分岐点から左に上がり、ヤクが放牧されている広い草原には放牧チベット人のテントが3張りあった。17時にラトオラ峠を越えてテント場についたのは18時10分。

10月12日(2度C) 9時50分から歩き始め10時15分馬に乗る。11時15分夏用の放牧小屋(4000 m)に着く、時間は早いがツワラ峠(4950 m)を越えて次のテント場までは無理なので此処に泊まることになる。時間がたつぷりあるので背後の山を登ったが、登っても登っても展望は開けず、この高度の山登りは息が切れるので明日登る峠道をカメラに入れて下ってきた。

10月13日(マイナス3・5度C) 昨夜は焚き火の上の煙り出しから星空がきれいだった

が、今朝も快晴で一面に霜が降りたが土がないので霜柱は立たない。8時10分発。道はほとんどん高度を上げて、10時10分〜30分少憩、峠の手前で馬を下り歩いて11時15分峠に着く。峠から高度を50 m上げれば、5000 mになると考えていたが、峠からはがらのガレ場で風も強く危険であり、これは断念した。12時までねばってゲニイ山の雲の切れ間を待ち、どうにか写真を撮ることが出来た。峠からは急な下りで歩きだが、箱根街道の石畳を馬で上り下りしたのはよほど馬術に優れた人などと考えながら歩いていた。岩ばかりの処に13時水場が顔を出し、14時には草地が現れた。テント場17時。

10月14日(0度C) 馬を後に歩いて出発するが、この辺から道は広くなり2〜3人並んで歩けるくらいになったが、所々昨年の大雨の崖崩れでやっと一人通れる処もあった。丁度先頭を一人で歩いていいたとき、崩れた細い道から降りてきたチベット人の馬が初めての外国人の服装に驚いて竿立ちとなり乗り手は仰向け様に落馬して動かなくなった。心配して様子を見てみると動き出し馬に乗ったのでほっとした。

10時ころには河原を通る道となり馬に乗って行くが、何回も馬で川を渡り一度は鏡に水が着く幅10 mくらいの処もあった。11時に

やっと人家のある処まで降りてきたので、もうキャラバンも終わりとのんびり馬に乗っている。3時頃、前方に三輪トラックが止まっていた。運悪く先頭にいた私の馬はその横を通るとき、初めての文明の利器に驚いたのか急に駆け出した。慌てて引綱（今日は手綱がなかった）を引いたので馬は首を右に曲げ私はその左側から落馬、尻皮が何かに挟まり横半分に切れてブレーキになり、頭から回転し受身の形で落ちたのだがほんの少しのかすり傷。またサブザックの中のカメラ、望遠レンズも無傷だったのは不幸中の幸いで、やはり悪運が強いらしい。

15時15分に総ての荷を降ろし、馬子たちは別れていった。宿舎に連絡を頼み前日から着いているパジエロが迎えに来て、巴塘のホテル着15時50分、10日ぶりの汗を流すことが出来た。

昔の記録によると旧道のこの区間は山賊の巢窟で鉄砲を持った兵隊の護衛付きの記述が多くあるけれど、その心配は全くなかった。しかし、ホテルで調べてみると中村君のサブザックに付けてあったカラビナが無くなっており、私のキスリングの中の化粧道具入れにしまっておいた予備の腕時計が紛失していた。また中村君の友人の馬子に持たせておいた双

眼鏡は12日に泊まった放牧小屋に置き忘れたと言っており、これも怪しいものではあるがこの程度なら仕方ないことだろう。

* この地方は雨が少ないのか、ラマヤ、波密、巴塘のチベット人の住居は平屋根の二階屋（一階は家畜、二階は住居）屋上に高さ1mくらいの囲いが作っており、物干しの場所を取り入れた大麦、干し草などはそこに干し、脱穀などの作業もそこで行われている。屋上へは外から梯子で上下しているらしい。この地方は山地で家の周りに平地がないことと、家の周りに置くとうろついている豚、山羊、馬に食べられてしまうのかもしれない。ラマヤからチベット高原に入った地域に政策的な官給？の中国式瓦屋根の丸太小屋が10軒以上散在するのを見てきたが、どうも外観からは使われている様子は見られなかった。

* チベットは鳥葬の国として有名であるがこの地方は土葬がほとんどで、高僧と金持ち階級だけが火葬とのことである。チベットには水葬をする地域もあるのだが、この地域にはそれが出来る大きな急流はない。

* キャラバン中の炊事は圧力釜を使い、夕食はご飯と缶詰の豚肉と玉葱、きゃべつの炒めにスープなどで、私たちが持っていたカールウ、ホワイトソースルウで作った料理

が一番のご馳走だった。朝は残りのご飯をお粥にして、佃煮、ザーサイ、腐乳などで食べていた。昼は中国のラーメンまたはビスケットにゆで卵、スープなどだった。ただし車で移動するときはどんな小さな店に入っても4、5品の四川料理で箸と茶碗が薄汚れていることを除けば安くて旨くて満足できるものだった。

* 高山病対策として、飲み薬と睡眠薬を中村君が準備してくれたが私は使うことはなかった。携帯用酸素ボンベも1本もついていたが使用しないで済んだ。私は下界同様に毎晩水割りを2杯元気に飲んでいった。

* 高度計は2台あったが約60mくらいの誤差があった。中村君の持参したヨット用の携帯位置測定器は地図上における峠、テント場の位置測定などにおおいに役立つものだった。

10月15日〜17日 巴塘―成都

ラマヤで小雨にあった他はキャラバン中は晴れの日が多く曇っても雨は降らなかった。巴塘からは曇り後小雨となったが、4000mを越える処では銀世界だった。4950mのツワラ峠で氷雨か雪だったら随分惨めなトレッキングとなったことだろうと私たちの幸運を感謝している。なお、巴塘寄りの道路は

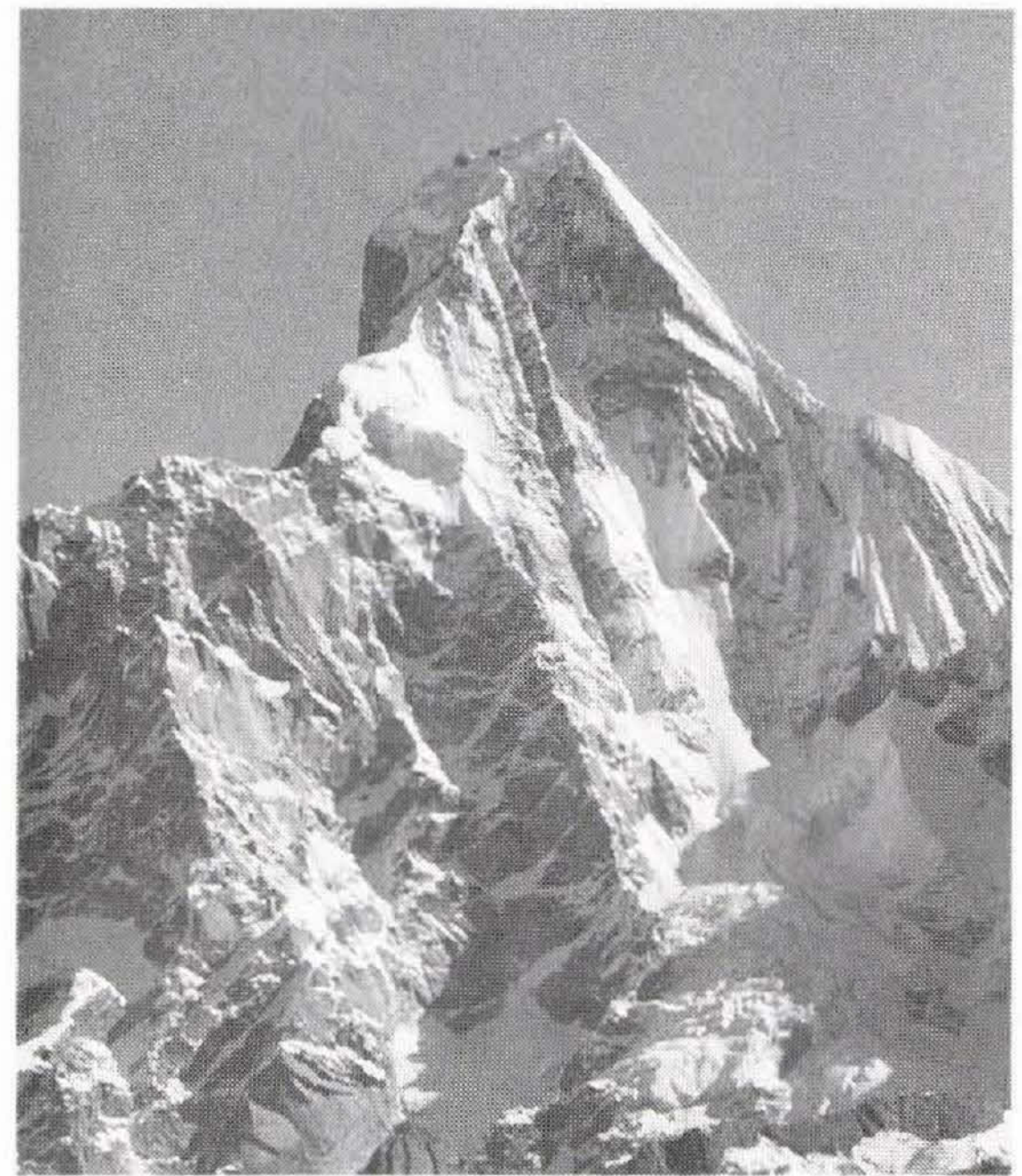
昨年の水害で酷く傷んでおり、理塘手前ではチベット仏教寺院の遊牧民に対する出張サービスの大テントが設置されて、大勢のチベット人が集っておりゆつくり写真を撮ることが出来た。

四川省・^{チヨンライ}邛崃山系、四姑娘山をめぐる未踏の岩峰群（1998年7～8月）

中村 保（昭33）

数年前に広州からウルムチに飛んだ時、四川盆地から邛崃山系の中心部である四姑娘山の上空を通過した。機は眼下に主峰（6250m）をかすめ北西に進路を辿ると、予期しなかった景観が展開した。美しい溪谷を取り囲んで屹立する無数の岩峰群が巨大な円形劇場を形造っている。以来そのエキサイティングな光景は私の脳裏から離れなかった。

四姑娘山とその南面は今ではトレッカーや観光客で賑わっているが、北に目を向けると、そこには天を突く花崗岩の尖峰や高さ1000m前後の豪壮な岩壁が聳えている。もし氷



① 四姑娘山主峰（6250m）南面

河が十分発達していればフランス・アルプスのシャモニー針峰群や南米パタゴニアのパイネやフィッツロイ山群の岩峰群に匹敵するだろう。これらのピークは5300～5900mの高さで、二つの美溪の両岸に集中している。アプローチは比較的容易であり、中国人民解放軍の5万分の1地形図で位置と標高を詳しく特定できるにもかかわらず、アメリカのクライマーが一部を訪れた以外は殆ど知られておらず、多くの際立った岩峰は手付かずで残されている。長坪沟溪谷のピーク以外は写真すらない。

七月から八月にかけては雨期の最盛期にあたるため、多くを期待できないと自分に言い聞かせて出発したが、「中村先生は晴れ男

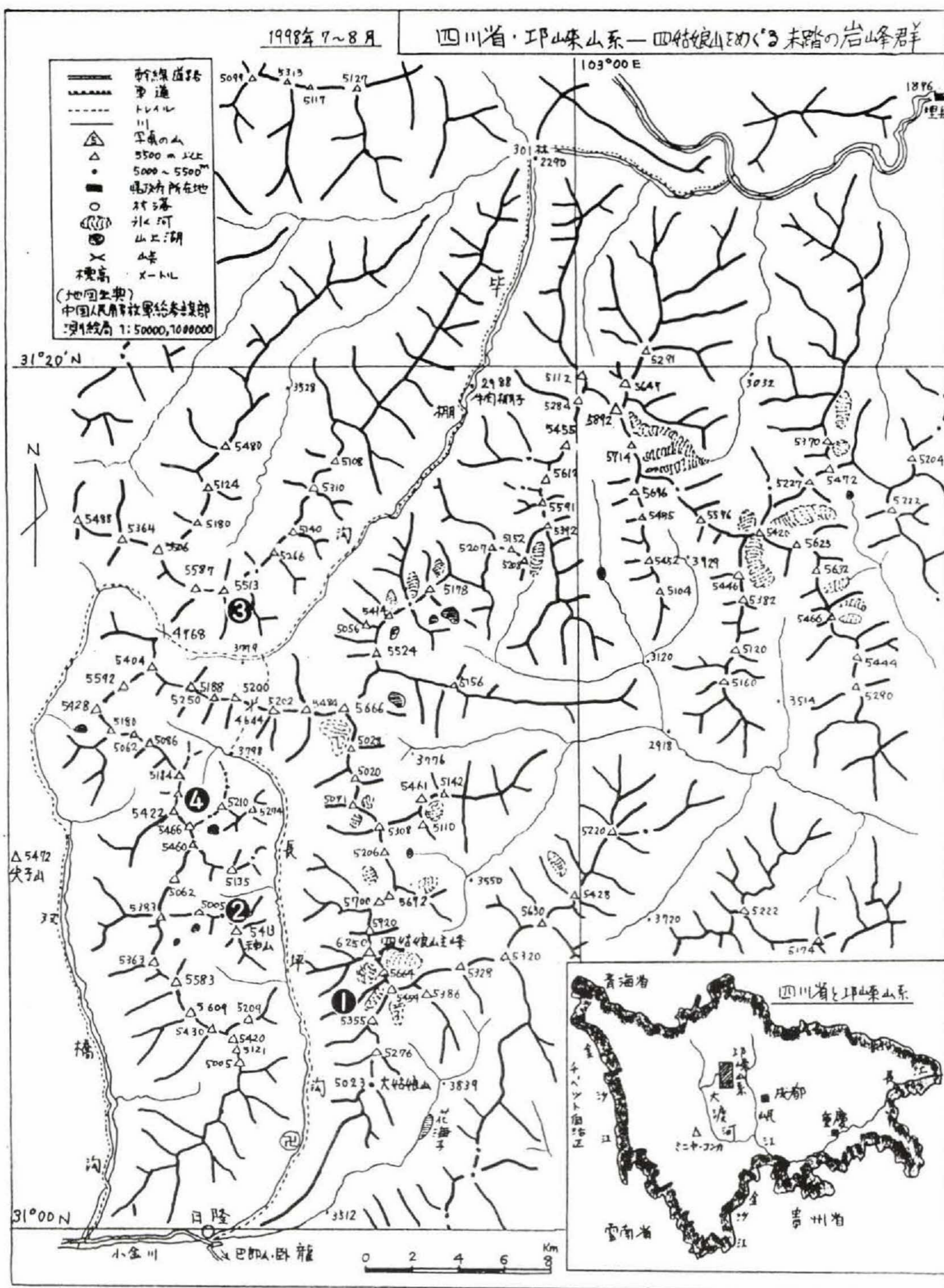
だ」といつも現地の人からいわれているように、今回も天候には恵まれ、予想以上の収穫を手にすることができた。何しろ、1998年は長江中流域に大洪水をもたらしたように、異常に雨が多くキャラバンを始める前日まで九日間休みなく降り続いたというから、私はラッキーだった。旅の計画段階でテーマを三つに絞った。

AⅡ山域の北側、理県からアクセスして、邛崃山系第二の高峰5892m峰のプロファイルをとらえる。このピーク周辺は山系の中で氷河が最も発達しているらしい。

BⅡ山域を北から南に縦断する。毕棚沟（ビーブンゴウ）を詰めて、源頭部付近で岷江および大渡河のそれぞれの支流の分水嶺をなす4644mの峠を越え長坪沟を下り、四姑娘登山の起点・日隆（ジロン）に出る。岩峰群を巡る五日間のトレッキングは今回の山旅のハイライトである。

CⅡ日隆から車で馬尔康（マルカム）に出てさらに北上し、羊拱山（ヤンゴン）の4450mの峠を越えて黒水（ヘイスイ）を通って成都に戻る。长征の史跡と羌族の石碉の村を訪れる。

結果は、Aは溪谷の増水で丸木橋が流失していて先に進めず断念。Bに日程とエネルギーを重点配分し、所期の目的を達成することができた。Cも予定通りトレースしたが、



特筆すべき遭遇や体験はなかったし、山との直接のかかわりもないので、ここでは触れない。

ハイライトであった毕棚沟から長坪沟への踏査は、私にとって「小さなパイオニアワーク」ともいえる、充実した新しい発見の旅で

あった。一つには、私が知る範囲ではこの峠越えのルートは外国人にとっては初めての行程であり、後からわかったことだが、このトレールは交易路ではなく、ヤクの放牧か薬草採りのための往来に使われている道で、馬や口バが荷を運ぶには相当難儀する。キャラバ

ンを組んで私は馬に乗り、荷物は口バに積んで移動する計画を進めたが、かなり無理をせざるをえなかった。

もう一つは、溪谷を囲む5500m前後の山々の、花崗岩の個性的な岩峰が連なる景観の見事さである。次から次へと現れる尖峰や重量感のある岩峰に我を忘れてシャッターを押す。四姑娘山主峰(6250m)と長坪沟を挟んで対峙する神山(5413m)、アメリカ人はセレスティアル・ピーク、つまり「天空の峰」、チベット人はプニユーと呼んでいる。文字通り天を突く岩のピラミッドである。

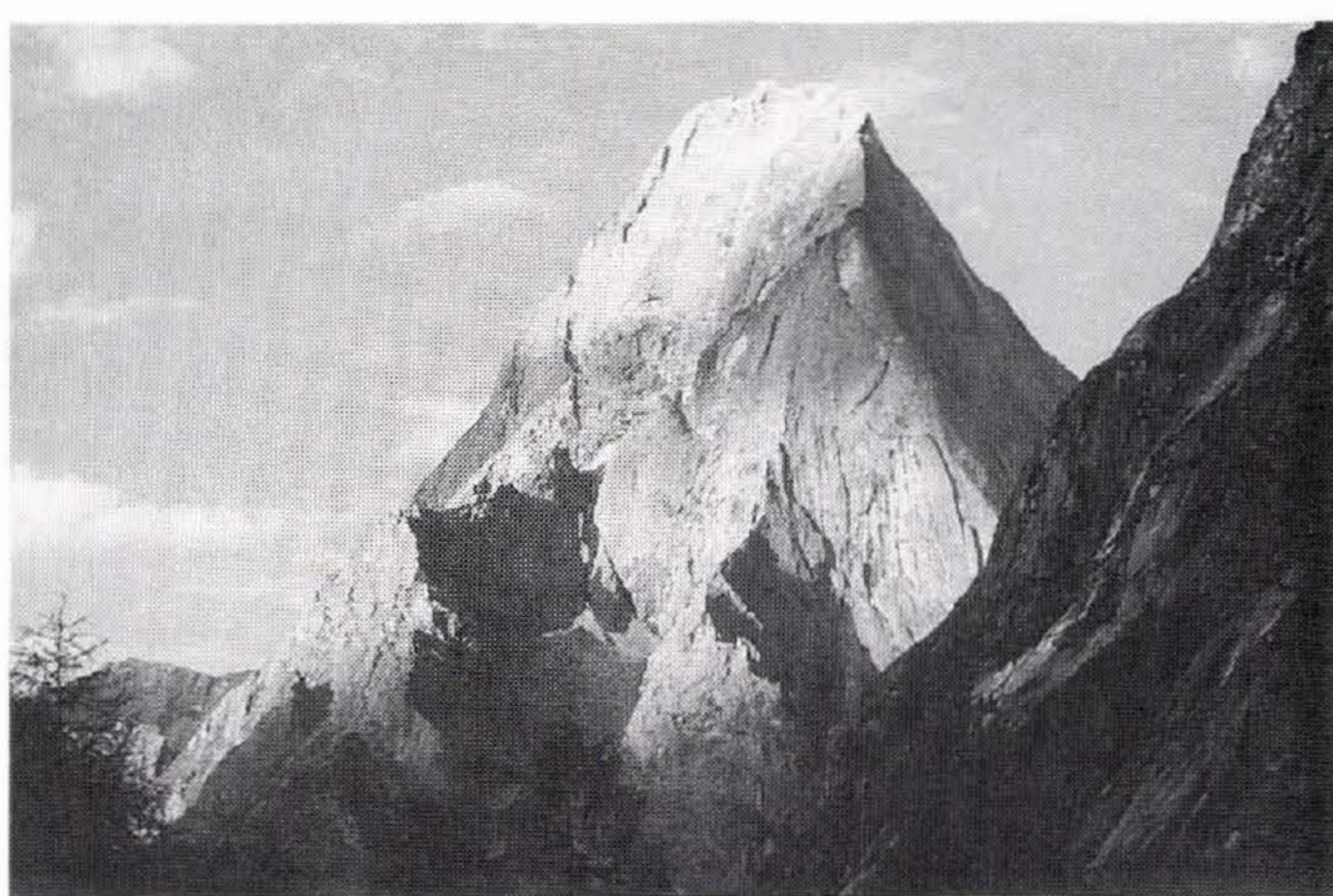
1983年にアメリカ人によって初登頂されている。このピークに優るとも劣らないユニークな、そしてクライマーにとっては垂涎の岩峰がキラ星のごとく現れる。

しかしこれらのピークは二つの溪谷の両側に位置する山稜上のものだけで、山系全体は東西に広がり、かつ理県の北側にも5500mの山塊がある。5892mを筆頭に、まだ知られざる多くの雪山、岩峰があり、規模は小さいが氷河や山上湖が点在している。今から一世紀前、1896年に英国ビクトリア朝の女性旅行作家、イザベラ・バードが記述して以来、誰も書くことのなかった山域の中心部を、わずかに点と線で結んだのが、私の今回のトレッキングだと思ふ。山系の全容を把

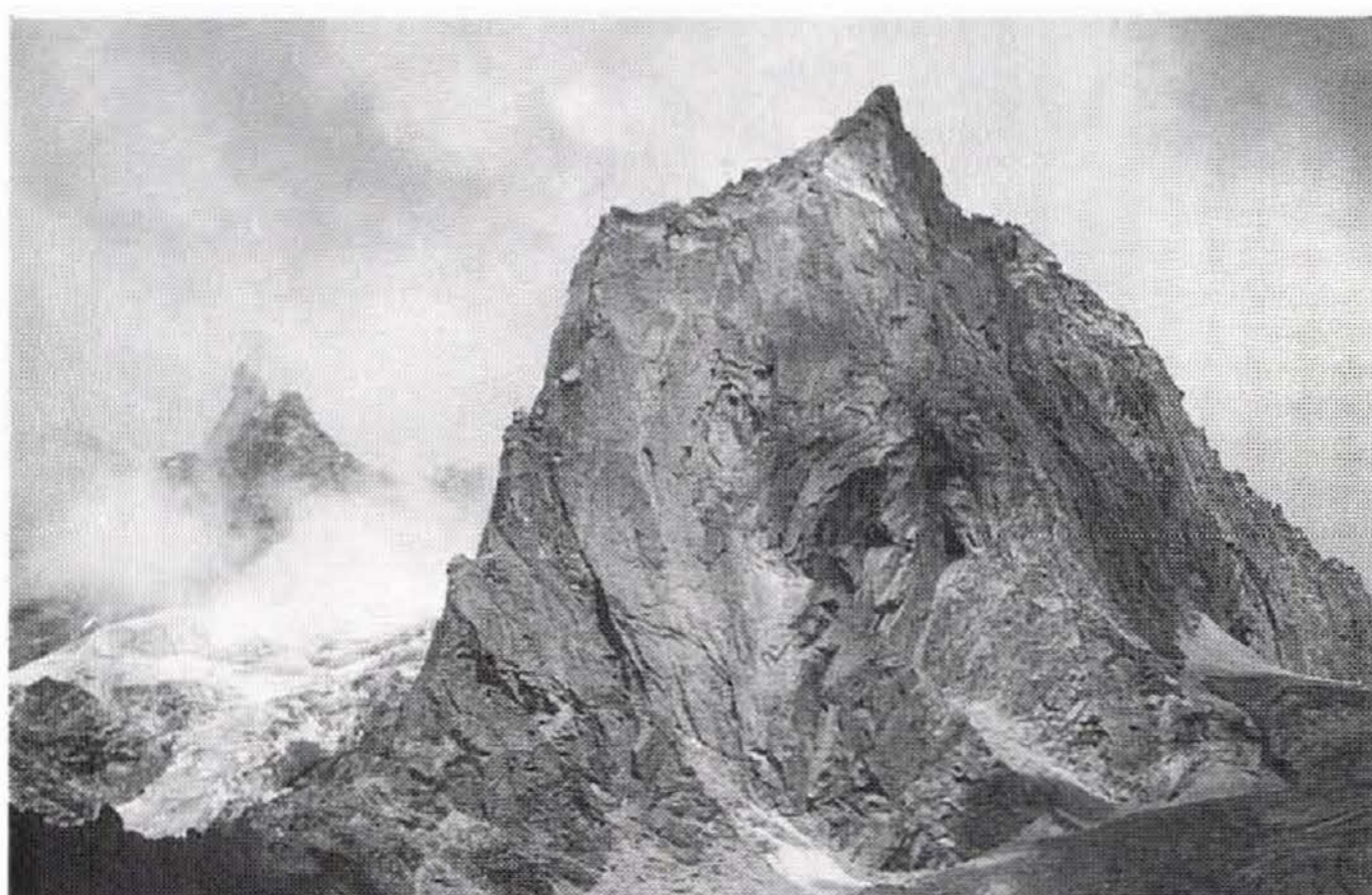
握するために、近い将来再訪してみたい。

以下、日程屋キャラバン構成について概要をまとめ、読者の参考に供したい。なお、現地での旅行手配は長年、私の世話をしてくれた四川探検旅遊公司(成都)張兄弟に任せました。同行ガイドはアメリカ人と付き合いの深い漢族の陳さん。彼は四川・チベット辺境に精通している愛称「レニー」という英語の達者な快活な男。レニーの機転と行動力、交渉力がトレッキングを成功に導いてくれた。

7月25日 空路、東京→上海→成都へ達する。
26日 成都から理県へは車で移動。理県の



②「神山」五四一三m峰東面



③五五一三m峰南面



④五四二二m峰、五四六六m峰北面

人口構成は漢・チベット、羌族がそれぞれ三分の一。美人が多い。キャラバンの馬の手配をするとともに、毕棚沟への道について情報収集する。

27日 理県から5892m峰の北側の谷へ偵察に入るが、途中から引き返す。

28日 理県から三〇九林をへて毕棚沟に入る。車道は牛肉棚子の先まで入っている。馬一頭、ロバ四頭を別の車で車道終点まで運ぶ。林間に天幕を設営。先の道が判然としないので羌族の樵を案内役として雇う。

29日 キャラバン出発。川沿いの悪路では到底馬に乗ることはできない。毕棚沟か

ら分水嶺の峠への分岐点を発見できず、源頭まで来てしまう。カール状の谷の牧草地でキャンプ。樵の案内役は役に立たない。道に迷ってしまったようだ。近くに日隆からきていた葉草採りのチベット族をガイドに雇う。彼のお陰で我がキャラバンは4644mの峠を越え、無事に日隆に出ることができた。

30日 分水嶺の4644mの峠を越える。道は穂高の涸沢から上へ登るような感じで、急斜面は馬とロバのために道を整備しながら進む。峠に着く前に天候急変、雨になる。一目散にヤクの踏み跡をたどって長坪沟に下る。対岸の霧が去来する岩峰群が夢幻的である。

31日 長坪沟源頭、開けた牧草地の奥は美しい花崗岩の障壁である。テントの下を水が流れた前夜の大雨が嘘のように天候が回復。フェアリー・ランドのような長坪沟を下る。湿地帯ではロバが腹まで泥にはまり込んで苦労する。何度も徒渉を繰り返す。理県から来た二人の馬方は必死である。この日は神山の少し上流でキャンプ。

8月1日 ヤクの群が牧歌的である。池澹が交互に現れる。四姑娘山主峰北壁の下にキャンプ。ここまでツーリストが日隆まで登って来る。

2日 日隆着。葉草採りのチベット人の家で旅装を解いて五日間のエキサイティングな

山旅をつつがなく終えることができた。今回はハプニングが多く、私にとって新たな体験となった。またレニーとの出会いも面白く、楽しいものであった。

最後に、山を目指す若者たちにメッセージを一つ託したい。ブランド志向とでもいおうか、ヒマラヤであれ日本の山であれ、知り尽くされた有名な山にのみ向かうのも、それぞれ個人的関心のしからしむるところだが、今まで誰も訪れたことのない未踏のフロンティアを志すほうが、遥かに刺激的で心躍るであろう。中国南西辺境の横断山脈には、新しい発見の可能性あるフィールドが数多く残されていることを知っていただければ幸いである。

山男の北米大陸横断ドライブ

上原 利夫 (昭33)

〈動機〉

針葉樹会員の塩川清彦君 (昭33) はアメリカ生活二〇年になる。この間、彼はサンフランシスコ・ニューヨーク・ロサンゼルス・フィ

ラデルフィアと大陸横断の転居をしている。今回再びロサンゼルスへ移住するに際し、一度はやってみたかった大陸横断ドライブを決意し、仲間を募った。最初に応じたのが同じく針葉樹会員の丸山則二君 (昭33)、次に手をあげたのが私であったが、丸山君が直前で不参加となり、日頃山行を共にする同期のY君を誘った。結局65歳の山好き三人で、ニューヨークからロサンゼルスまでの直線で4500kmを、半月かけて、モーターに泊り、自炊もしながら、塩川君のトヨタ・カムリで走る事になった。

その動機は三人三様であった。しかし、共通点は「山」。実際はハイキング程度であったが、大陸分水嶺が走るロッキー山脈のエステス国立公園 (コロラド州)、ソルトレイクシティに住む加地幸雄君 (昭33) に案内された加地邸裏山のビッグビーコン (ユタ州)、インディアンの多いモニュメント・ヴァレー (ユタ州)、アラスカ州を除く合衆国の最高峰ホイットニーの近辺 (カリフォルニア州) を偵察した。デスヴァレー (カリフォルニア州) も含めて、アメリカ西部の大自然の風景には圧倒されるばかりである。

〈ドライブ行程〉

平成12年3月21日から4月5日まで16日間

の行動を紹介したい。宿泊はすべてモーター2室を利用し、朝食は宿泊代に含まれているコンチネンタル。夕食は電気炊飯器と電気湯沸かしポットだけの自炊が多かった。日本から持参した、干し魚のおつまみ、うなぎの蒲焼き、カレー、鶏肉のほか、味噌汁、お茶に加え、羊羹とカステラは美味しかった。昼食に、海苔巻きの梅干入りおにぎりを何回か作った。

食事の楽しみと運動不足は、体重を増加させてしまったが、食事・宿泊・ガソリン等のドライブ費は平均して1人1日50ドル程度に収まっている。なお、通過した州は15州 (NY, NJ, PA, WV, OH, IN, IL, MO, KS, CO, WY, UT, AZ, NV, CA)、走行距離は7358kmであった。

21日 (火) —— ニューヨークのホテルを同期の友人林君に見送られて11時に出発。インターステイトの「ルート80」に乗る。バトラー (ペンシルバニア州) に宿泊。夕食のイタリヤ・レストランでアメリカの田舎の和やかな雰囲気も味わった。走行653km。

22日 (水) —— 塩川君が社長をしていたJSP International のバトラー工場を見学。この工場は乗用車のバンパーに入っている発泡ポ

リプロピレンを製造しており、アメリカでのシェアは70%という。ここから「ルート80」を行くか、「ルート70」を走るか。天候の良くなかったシカゴを経由する「ルート80」を止め、ピッツバーグからデンバー迄は大陸のど真ん中を走る「ルート70」を選んだ。

まずはウエスト・ヴァージニア州を僅か20km走りオハイオ州へ。ところがこの短い区間は魔の区間。制限速度は75マイル(120km)から55マイル(88km)に下がっている。うつかりするとスピード違反。畏にはまった悔しさからではないが、オハイオ州はコロンバスやデイトンの都市に寄らずに、インディアナ州インディアナポリスまで一跨ぎ。走行700km。

23日(木)——中西部の広々とした穀倉地帯に入る。サイロと農家が点在するイリノイ州を通過してセントルイス(ミズーリ州)へ。ミズリー川がミシシッピ川に合流する港町に往時の面影が残る。ユニオン・ステーションの内部がシヨッピング・モールになっていた。なつかしい「ルート66」という名のレストラウンが4月に開店するところであった。「ルート66」はシカゴ・ロサンゼルス間にあったようだが今はない。このルートはセントルイスを経由していたのだろうか。

ブルースで有名な過去のセントルイスも「ここから西部」と巨大なアーチを建て、これをシンボルマークとしている。160数年前に東部に住むインディアンが、連邦政府によってミシシッピ川の西側に追いやられたのを知ると、「ここから西部」の印象は強い。

農場の広がるミズーリ州を横断してカンサス・シティ(ミズーリ州)に宿泊。カンサス・シティはミズーリ州とカンサス州に跨り、市内にカンサス川が流れている。Kansasのアメリカ読みはキャンサス、ドイツ読みがカンザス、日本人はカンサス。日本の監査役を研究している私は「監査役ハ取締役ノ職務ノ執行ヲ監査ス」(商法274条)を思い出した。アメリカに監査役協会を設立するならカンサス・シティだ。走行710km。

24日(金)——7時に出発して、カンサス州の「ルート70」をひたすら走る。カンサス州の平原に見える摩天楼はエレベーター(穀物サイロ)である。ドイツ、東欧系の農民が多いらしい。

平坦のごとく見えてもコロラド州へは緩い上りで高度差は1200m。加地君との約束日に間に合わせようと、カンサス州は一気に通り抜けてデンバー(コロラド州)に宿泊。モーター近くのバーベキュー店でリブステー

キを注文したら下駄より大きい。翌日の朝と夕の3回に分けることになった。走行1040km。

25日(土)——「ルート70」を離れて、シャイアン(ワイオミング州)で「ルート80」に乗ることにした。デンバーのダウンタウンはフリーウェイから見ただけだが、北に向かって住宅地がドンドン伸びている。カリフォルニアより空気が良いので電子工業が集まりつつある。成長の止まったセントルイスと対照的。空気が良いだけではない。ロッキーの景色もよい。山やスキーもできる。水も良い。この辺りの水で日本酒を製造している。アメリカ産の月桂冠、大関、松竹梅を見た。

ロッキー山岳国立公園の保養地であるエステス・パークから見える標高4000m近いロッキー連峰が大陸分水嶺である。標高3000mの裾野で雪上ハイキングを楽しんだが、土曜日で訪れる人も多い。彼らが履いている、踵が上がる底つきの「わかん」を初めて見た。デンバーから近いエステス・パークはヨーロッパの風情があり、楽しめる観光地である。次は名前の響きが美しいワイオミング州へ。この州の人口はアメリカで最も少なく、51万人しかいない。州の北西端にイエローストーン国立公園があるが、そこから東南に走る大

陸分水嶺のロッキー山脈がコロラド州に向かう。ガソリンスタンドもポールがポツンと一本立っているような過疎地である。西部劇で親しんだ牧場のララミー（ワイオミング州）に宿泊。米をとぐ水がとつても冷たい。この水で缶ビールを冷やし、昨夜のリブステーキをかじった。走行417km。

26日（日）——西部開拓史の中で、オレゴン・トレイルというロッキー越えの馬車道があった。シャイアンからソルトレイクシティ迄の「ルート80」がその跡ではなからうか。



左から加地夫人、上原、加地、塩川の各氏
(2000年3月、加地邸で)

ロッキーの分水嶺は平地のような感じだったが、全体の標高が1000m以上あるので、馬車でここに到達するのは苦労であつたらう。われわれの自動車もここで左後車輪がパンクした。スピードを出していただけに、その無残なタイヤの姿。刃渡り7cmの爪磨き用のやすりを拾ったのである。30分でタイヤを交換し、スピードを落として出発。命拾いをした気持ち。

ソルトレイクシティへほとんど高度を下げて入る。郊外のモーターにチェックインしてから加地君宅を訪問した。大歓迎を受けて、テディー夫人の手料理をご馳走になった。針葉樹会員の何人かが既に訪問したという。ソルトレイクシティは、迫害を受けた3000人のモルモン教徒が指導者ブリガム・ヤングの下に、イリノイ州から2000kmを幌馬車で西進し、やっと見つけた新天地である。それは152年前であつたが、これを記念してTHIS IS THE PLACE MONUMENTが立っている。

後に銅とか鉛の鉱山で栄えた。その頃の鉱山主の別邸が今の加地邸である。正面と背後に冠雪の山が連なり、屋敷からグレートソルトレイクが見下ろせた。加地君が哲学や思想史を教えるユタ大学も歩ける距離にある。同じ大学の図書館に勤める夫人は膝を痛めている。

るので自動車を通うが、彼は雨の日も風の日も自転車を使っている。したがって、彼の自動車は17歳の息子さんが乗っている。ちなみに、31歳の娘さんはミシガン州に住み、5月にご結婚とか。走行675km。

27日（月）——加地教授の「古代ギリシャ哲学」を聴講した。20人位のクラスで、教授の独演のあと、学生との対話が行われる。現代の具体的事象が取り上げられ、アリストテレスが生き生きとしていた。眺めの良い大学のキャフeteriaで昼食をご馳走になり、午後はキャンパスを案内してもらった。敷地180万坪、学生数2万5千人。州立大学であるが、州からの交付金では賄えない。したがって、寄付活動が盛んである。これについては如水会報に投稿したいと思い、資料をもらった。夕食は加地邸近所の日本料理店で加地夫妻をご招待した。走行135km。

28日（火）——午前中は雨のため休養し、タイヤ2本を新品に取り替えて加地邸へ。大学のゼミを済ませた加地君に案内されて、スポーツ用品や山の本を売っている店（REI）に行く。例のアメリカ「わかん」があつた。次にスキー場へドライブした。夕食は加地君の手料理である。加地君は近郊の山を歩

くほか、大陸分水嶺を北から歩き始めた。今までに歩いた距離は南北直線で88km、山道はくねっているので156km。分水嶺の全長は5000kmに及ぶが、入山下山を加えると6500kmになるらしい。大陸横断ドライブに匹敵する距離である。走行117km。

29日(水)——グレートソルトレイクを覗にいったが、遊覧船も何もない。塩分が強すぎるのだろう。加地邸で持参した餅を焼き、夫人も交えて昼食会。14時から加地君に案内されて裏山のビッグビーコン(2178m)を往復した。登り2時間、下り1時間20分。道中と頂上で、周囲の冠雪の山々を遠望し、町の広がりを見下ろした。登り口が既に1500mの高さだから、高度差700m程度のハイキングであった。

加地邸を夕方に辞し、60km南にあるプロボ(ユタ州)に宿泊。モーター横のレストランで夕食をとったが、客のマナーも、ピチピチ働く若者も気持ちが良い。この人たちはモルモンか? 走行160km。

30日(木)——モルモン教に興味を持ったので、午前中はブリガム・ヤング大学のキャンパス・ツアーを申し込んで見学した。敷地72万坪、学生数3万人。学生のマナーが良い。

午後からプロボを離れ、国立公園めぐりに入る。南下してアーチエス国立公園へ。アーチ状にくりぬかれた巨岩が見もの。モアブ(ユタ州)に宿泊。走行374km。

31日(金)——天候がくずれ、あられが降る。午後モニュメント・ヴァレーへ。ユタ州とアリゾナ州にまたがる「ナヴァホ・インディアン・リザベーション」にある。ヴァレーの案内はインディアンがする。ユタからアリゾナ、再びユタ経由アリゾナへ。ページ(アリゾナ州)に2泊。走行483km。

4月1日(土)——パウエル湖の遊覧船に乗る。コロラド川をグレンキャニオンダムで堰きとめた人造湖であり、ダムの水がグラント・キャニオンの下を流れる。乗船場はアリゾナ州だが、湖の大部分はユタ州である。ナヴァホ山(3116m)が聳える。レインボー・ブリッジ(ユタ州)まで1時間45分かかる。水と風でアーチ状にくりぬかれた巨大な岩で全米一の大きさ。テニスのラケットより一回り大きいザウルスの足跡が岩に残っている。この巨大な光景に相応しい大きさである。ここに働く人もインディアンが多い。英語を喋るが所作は日本人と似ている。チケット・カウンターのインディアンのおばさんが

塩川君に気を取られて、クレジットカードと乗船券を手渡すのを忘れたのも、血は争えない証拠か。走行59km。

2日(日)——グラランド・キャニオン(アリゾナ州)のノース・リムには少し雪が残り、日曜日にも関わらず観光客はちらほら。案内所も閉鎖されていた。少し歩いてから一路ラスベガス(ネヴァダ州)へ。

ラスベガスのモーターにはカジノがある。モーターもホテルも宿泊料金が大幅に安いのは、カジノで金を使わせるからであろう。スロット・マシンはパチンコよりギャンブル性が大きい。つまり、パチンコは遊戯性が大きい。これがラスベガスにパチンコが置けない理由であろうと、かねてよりの疑問が解けた。日本料理店で夕食を堪能し、シヨウを楽しんだ。走行610km。

3日(月)——砂漠にあるデヴィルス・ホール(ネヴァダ州)を見て、デスヴァレー(カリフォルニア州)へ。全米の最低地(マイナス84・6m)のバッドウォーターは、一面が塩で覆われている。次にカリフォルニアの最高地シハラネヴァダ山脈にあるマウント・ホイットニー(4348m)を見に行こうと、ローンパイン(カリフォルニア州)まで延々

と上ったり、下ったり、夕日が眩しいドライブだった。ひっそりした田舎町のモーテル「マウント・ホイットニー」に宿泊。走行458 km。

4日(火)——山岳地図がないので、どの山がホイットニーか判別できない。とにかく、ホイットニー・ポータル(登山口)まで車で入ったが、途中の落石が恐ろしい。ポータルから2時間足で登り、おにぎりを食べて引き返した。雪が深くなったからだ。ポータルで頭と顔が黒い珍しい青い鳥を初めて見た。それは BlueJay か Steller's Jay か。

車での帰りの路上に落石が増えていたような気がした。この恐ろしさにも拘らず、今度はホースシュー・メドウ(峠)まで、落石に注意しながら車で往復した。そのあとで、第二次大戦中カリフォルニアの日系移民が強制収容されたマンザナを訪ね、日系人の苦難を偲ぶ。走行125 km。

5日(水)——大糸線から見る後立山連峰のようなシエラネヴァダ山脈を右に見ながら、サンディエゴ経由ロサンゼルスへ向かった。途中のサンベルナルデインで JSP International の工場に立ち寄った。昼食はサンディエゴのミッションベイの海辺におい

て、最後に一つ残った缶ビールで乾杯し、コースト・ツー・コーストの完走を祝った。その後、ラホーヤの友人宅に立ち寄って、ロサンゼルス南80 kmにあるミッションピエホの塩川邸に向かった。走行642 km。16日間の合計で7358 km。

〈おわりに〉

ここで大陸横断ドライブは終わったが、このあと塩川邸の設営にまつわる苦労があったことを触れておく。彼はここで永住の構えであり、アメリカの大自然を探索することであろう。新住所は下記の通り。

Kiyohiko Shiokawa 23296

CopanteMission Viejo, CA 92692 USA

Tel. 1-949-830-0912 Fax 1-949-829-0954

E-mail: shiokawa@concentric.net

65歳男が3人とも、病気をせず、怪我もせず、16日のドライブを無事に完走できたのは、余程の幸運と思う。いかに周到な準備をしても、この歳になると土壇場で、または途中で、何かがおこるのが普通ではないか。この無事故ドライブは最初で最後の試みであった。周囲の人の絶大な協力があって実現したことであり、簡単にお勧めできるものでない。また、同じ顔を突き合わせて半月も共同生活をする

のであるから、普通は困難。山岳部で若いころ鍛えられた何かがあったと思う。ドライブでも長期になると、登山と共通する厳しさはあると思う。

アメリカの登山について、今後も加地君と塩川君はそれぞれ、時には一緒に計画すると思うが、よきパートナーは手を挙げられては如何でしょう。(2000. 5. 5)

鉄道旅行の楽しさ

三井 博(昭37)

幼い頃から鉄道に憧れ、電車や汽車に乗車することに無類の喜びを感じていたが、長ずるにしたがって、音楽鑑賞や登山、仕事、ゴルフ、車など熱中する対象が多くなり、鉄道旅行は片隅に追いやられていた。しかし、6年前から関西勤務となり、単身赴任の気楽さから、休暇などを利用して日本全国の鉄道に乗車してきた。そしてついに1998年3月1日に福井県越美北線の終着駅、九頭竜湖駅

に下り立ち、日本全国のJR線の完全乗車を完成した。

鉄道旅行の楽しみは、もちろん車窓から眺めた景色である。山の眺望に関しては、本州中央部を走る中央本線、大糸線、小海線、飯田線、北陸本線などご承知の列車が優れている。

しかし、私の記憶に残っているのは、予想外の風景に出合ったときである。11月の終わりの頃、北海道の旭川から午後の富良野線に乗り込んだ。平凡な郊外の風景が終わると雪山の連峰が目の前に現れた。列車から山裾までは枯れた草原状の平地が続く、そこから雪をべつとりと付けた砂糖菓子のような山がそそり立っている。山は石狩山地で、大雪山の旭岳、トムラウシ山、十勝岳、富良野岳などが列車と並行するように連綿と続き、思いがけない光景に感動を覚えた。富良野線には数回乗車したが、この時以外は雨などで山は見えなかった。

1996年12月28日、東北地方の未乗車区間を片づけて、山形駅から山形新幹線に乗り込んだ。米沢駅を発車すると雪景色になり、山が迫って真っ白なクリスマスツリーに綿を被せたような景色になってくる。峠駅を通過する際は、一面に枯木に花を咲かせてダイヤモ

ンドがキラキラ光るような光景が広がり、車中の大人も子供も一斉に感嘆の声を上げた。どんな芸術写真でも捉えられないような幻想的な瞬間であった。

五能線は岩木山を含む白神山地を一周する長大なローカル線で、東能代から川辺まで行く列車は一日に3本しかない。途中は日本海の荒波が打ち寄せ、僅かな民家は戸を閉ざして縮こまっている。鱷木（とどろき）、風合瀬（かそせ）、大戸瀬（おおどせ）などいかにも風が強そうな駅名が続く。海岸沿いは消波用のテトラポットが並んでいるが、所々に砂浜があり、鴉が20〜30羽と鳥が1羽、押し寄せてくる波の方向に向かって一列に整列して海を眺めていた。理由は不明であるが、忘れがたい侘しい風景である。

景色以外では、鉄道車両や設備、駅舎や施設なども興味深い。木次線（宍道〜備後落合）に乗車した時のことである。列車が山の中に停まると、突然運転手はハンドルを外し、車両後部に駆けていった。一両車両のディーゼルカーの後部にも運転席があり、そこにハンドルを嵌めると制動を解除し逆方向に走り出した。これは出雲坂根駅の三段式のスイッチバックのためであるが、ハンドルを外すのは他には見られない仰天する出来事であった。スイッチバックは現在は数カ所を残すのみ

となっているが、九州に3カ所ある。その内、豊肥本線の立野駅は急行が停車する主要駅であるが、スイッチバックである。逆に自動信号が整備されておらずタブレット方式による安全確認を採用しているのは東日本に多く、千葉県久留里線もこの方式である。

駅舎の佇まい、及位（のぞき）など難解読の駅名、入手に苦労した硬券切符、駅員や運転手との会話など、まだ書きたいが、紙数の制限があるので、駄文のペンを置くことにする。

「酔生夢死」の余生をめざして

中橋 寿雄（昭39）

昨年の三月に麒麟ビール株の取締役を退任して顧問となり、三十五年にわたる会社生活を卒業した。その間わが人生の理想「酔生夢死」をめざして仕事一筋の生活を続けてきた。そして今年六月五日に六十歳になった。これを古来還暦というらしいがその実感は全く無い。しかも突然仕事が無くなって時間が

たつぷりできてしまうという状況は考えたことも無かったので、当初は多いに戸惑いを感じたのが正直なところである。

仕事と通勤ストレスから解放されて自由の身になったのは大変うれしいのだが、新たな職に就くことは大変なエネルギーが要るし、このまま「酔生夢死」というのも情けないしと、あれこれ考えるうちに、やはりこれからが本当の自分の人生なのだから「自分のやりたいことだけをやる。やりたくないことはやらない」と割り切ることにした。

ところがそれにも大きな障害がある。十年前に「変形性頸椎症」による脊髄圧迫で手足の痺れと麻痺が発症し手術をした。七時間の手術だった。しかしその後遺症がなかなか回復せず、山行はおろかゴルフもできない身体になってしまった。元気であれば「百名山」も魅力があるし、足腰の老化防止のためにゴルフもやりたいが思うにまかせない。したがって「やりたいことをやる」といつてもできることは限られてくる。

そこで五体不満足でもできること、これまでやりたくてもやれなかったことから選ぶことにした。以下に私の一週間の生活パターンをご紹介します。

まず一週間通してやっていること。それは朝食・昼食・夕食のすべてを自分がつくるこ

とである。もともと食いしんぼなので美味しい料理を食べたいという願望は人一倍強い。またそれを自分でつくることは結構楽しいものである。特に新鮮な魚を美味しく食べたい。そのため「マイ包丁」も三本買った。ただし食器洗いはカミさんの役割である。

日曜日と月曜日は小旅行に行くために空けてある。火曜日の夜には「ポケ防止」のために如水会館で「一橋フォーラム」を聴く。水曜日の午後は「心のリハビリ」のために「スケッチ・淡彩」の教室に行く。木曜日は一休みで、金曜日の午前中には「身体のリハビリ」のために体操教室（自彊術）で身体を調整する。土曜日の午後には「手のリハビリ」を兼ねてクラリネットのレッスンを受ける。これらの合間にパソコンとデジタルカメラで遊ぶ。これが私の一週間である。

なかでも一番熱を入れているのは「スケッチ・淡彩」である。魅力的な絵を描く網干啓四郎という先生の教室に通い始めてほぼ一年になる。ダーマトグラフという紙巻き鉛筆と透明水彩絵の具を用いて描くわけであるが、これがなかなか難しい。ダーマトグラフはワックス入りの太い芯の鉛筆で、一度描いた線は消すことができない。また絵の具は油絵の場合と異なり白は使わない。白はスケッチブックのカミの白を残す。描く心構えは平常

心と自然体が求められるが、これも未熟ゆえに難しい。したがって、なかなか品格のある絵にならない。未だに悪戦苦闘しているが、描いている間は全てを忘れて無心になれる。人前に出せるような絵が描けるように早くやりたいものである。

読むに耐えないことをいろいろ書いてしまったが、現役時代にはやりたくてもやれなかったことを今やり始めている。新しい出会いもある。余生を楽しむ余力を貯えながら続けられるだけ続けていきたいと思う。やがて体力と気力にも限界が来る。その時こそそれが理想「酔生夢死」に身をゆだねる時だと思ふこの頃である。

会員からのお便り

加地 幸雄 (昭33)

会報楽しく読ませて頂いております。

上原、塩川君とはなんと42年ぶりの再会で、私の授業のため時間が限られていましたが楽しい一時でした。

両君にも伝えましたが、文字通り途轍もない山歩きを始めました。カナダの国境からメキシコの国境までの米大陸分水嶺縦走です。

去年の八月にその端緒にあたる氷河国立公園 (Glacier National Park) を終えましたので、お言葉に甘えて、書かせて頂きます。九月にお届けできると思います。

その山旅の続きは、今年と来年の八月の山行で第二段階に当る The Bob Marshall Wilderness Area Complex を終る計画です。その節も報告させて頂きます。

小林 進二 (昭36)

上州の主要な二千m級の山をカミサンと登る心づもりはあるのですが、つい安易な温泉巡りとなって山登りはなかなか実現しません。目下の目標は、皇海山、白砂山、四阿山、黒

斑山です。投稿はこれ等が実現されてからにさせていただきますと思います。

原 博貞 (昭41)

念願の「田舎暮らし」を実現すべく那須に来て一年、那珂川越しに那須の山々を見晴らす丘の雑木林の中に小さな山小屋風の家を建てました。すぐ横には温泉がありゴルフ・ウォーキングの楽しみには事欠きませんし、芭蕉の「奥の細道」に関わる史跡歩きを楽しむ事も出来ます。

東京から東北新幹線那須塩原駅迄一時間十分、そこから車で二十分で左記住所の新居です。未だ家の周りは林のままで庭となるのは時間がかかりますが、是非泊りがけで遊びに来て頂くよう夫婦共々お待ち申し上げます。まずはご案内迄。

〒324-0235

栃木県黒羽町堀之内675-34

電話・ファックス

0287-59-0670

中村 雅明 (昭43)

(前略) 私儀三月三十一日をもちまして株式会社菱化システム及び三菱化学株式会社を

退社致しました。昭和四十三年に三菱油化株式会社に入社以来、三十二年に亘り、公私共何かにつけ格別の御指導と御厚情を賜わり、心より御礼申し上げます。

今後はしばらくの充電・休養期間をいただき、心身共にリフレッシュし、IT革命の担い手である情報サービス産業で再スタート出来たらと思っておりますので、今後とも変わらぬ御指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら皆様のご健康とご発展をお祈りし、略儀ではあります書中をもって御礼のご挨拶とさせていただきます。

平成十二年四月

松尾 信孝 (昭48)

針葉樹会会員の皆様、メールでのご連絡で失礼します。

この度勤務先の旭硝子を早期優遇退職し、蓼科でペンションを開業いたします。6月いっぱいかかり内部を改装し7月8日頃から開業できる運びとなりました。

場所は、ビーナスラインから入った東急リゾートのの中のほとんどどんづまりのほうで、標高は1600メートル弱の所です。裏が八子ヶ峰で健脚なら45分ほどで頂上というくら

いで高さの想像が出来ますでしょうか。前には千丈、甲斐駒、その横から北岳が少し顔を出しているというおなじみの蓼科方面からの景色が広がります。

追ってパンフレットをお送り申し上げます。落ち着いた、中高年がゆっくりできるような場所にしたいと思います。この辺の山をブラットする時のベースにでもご利用頂ければと思います。

尚、新住所とメールアドレスは左記の通りです。

茅野市北山4026-1025

アダージオ

Eメール Matsunobu@aol.com

宜しくお願いいたします。

中西 茂 (昭56)

私儀この度、日商岩井ニューヨーク店に勤務致す事となり、この程着任致しました。

プロジェクト金融部在勤中は公私にわたり一方ならぬ御厚情を賜り、厚く御礼申し上げます。

今後、新任務に一層精進致す所存でございますので、何卒倍旧の御指導と御鞭撻を賜ります様お願い申し上げます。

まずは略儀ながら書状をもって御礼かたがた御挨拶申し上げます。

平成十二年四月

《勤務先》 Nissho Iwai American

Corporation, Finance dept.

1211 Avenue of the Americas

New York, NY10036, USA

Tel 1 (212) 704 - 6584

横山 皖一 (昭27)

七月九日、カトマンズへ六カ月間、日本語の先生で赴任します。先日、中樹会の仲間と両神山へ行ってきました。

訃報

▼柿原謙一さんは、1月16日、急性呼吸不全のため秩父市の病院で死去。葬儀は19日自宅で行われた。喪主は長男和夫氏。秩父鉄道社葬は2月8日秩父神社で行われた。

▼田中一雄さんは、2月18日、喉頭がんのため東京・杉並の衛生病院のホスピスにて死去。喪主は妻の美奈子さん。

なお亡くなりになった柿原さん、田中さんには針葉樹会より生花を捧げました。ご冥福をお祈りいたします。

●山行幹事より

昨年度は山行幹事の怠慢で懇親山行を企画することができず、針葉樹会会員の皆様には大変申し訳なく思っております。

小生が山行幹事を仰せつかった96年には雨飾山、以降97年は戸隠・黒姫山、98年は八ヶ岳西面と、いずれも秋に懇親山行を行なってきた訳ですが、今年はなんとしても紅葉のきれいな季節に1年ぶりの懇親山行を実施したく、皆様方の奮ってのご参加をお願い致します。

具体的な山はまだ決めておりませんが、時期としては10月21(土)～22日(日)、連年どおり土曜日の夜に山麓(もしくは少し山に入ったところの)宿に泊り、翌日に日帰り登山という形式を考えております。

山域についても、是非とも幹事にご意見等をお寄せください。

今までの経験ですと、かなり幹事及びその周辺の裁量で決めてきた部分がありますが、今のところ有明山・燕岳(中島さんメモリアル山行)、明星山等を考えております。

8月初めには e-mail、往復はがきで案内を差し上げる予定ですが、山域のご推薦、参加のご意向・ご要望等、何なりと幹事にご連絡いただければと思います。

編集後記

●今号もお二人の先輩に対する追悼文を何人かの方に書いて頂きました。残念な気持で一杯です。柿原さんと田中さん、両先輩のご冥福を心からお祈りします。

●次号には北米から大変興味ある記録が寄せられる予定です。会員便りで加地君(S33卒)が触れている通り、アメリカに住む彼が夏休みを使ってカナダ国境からメキシコ国境までの米大陸分水嶺縦走という、途轍もない山歩き“を始めたのです。その第一報を次号で読み頂ける筈です。彼の便りにある、来年夏に終る予定の第二段階を手持の地図でチェックしたところ、まだ最初の州、モンタナの半分弱の地点なのです。更に三つのタフな州が控えています。何年かける積りなのでしょう？彼の壮挙に声援をおくり、成功を祈りましょう。

(佐薙)

●赤阪の「みね」がひっそりと店仕舞いしたそうです。風の噂では故郷の長崎に帰ったのではないかとのこと。山岳部の裏面史？を知る貴重な存在だったのに、面白い話を聞いておけばよかった。

●田形氏より凍傷に関する興味深い原稿をお寄せいただきましたが、誌面の都合で次号に回させていただきますので悪しからず。ちなみに、次号の発行は10月を予定しております。夏休みのことなど、皆さんのご寄稿をお待ちいたしております。

(井草)